

[授業科目名] 小児医学特論 I		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 都築 一夫
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ ①小児によくみられる疾患であるアレルギー疾患と感染症を取り上げ、緊急時の対処や感染流行に対する危機管理ができるようになるとともに、日常生活の管理や予防を病態生理の面から正しい理解ができるようになる。②子どもの正常な成長を理解し、成長と肥満・痩せの評価ができるようになる。成長の支援、健康の増進や生活習慣病の予防が分かるようになる。③腎疾患や心疾患を例として慢性疾患児の学校生活における管理が分かるようになる。④思春期における医学的問題について適切な助言や指導ができるようになる。			
授業の概要 上記の到達目標に示した領域から、毎回、予め与えられた課題（テーマ）を予習し発表する。これを受けて質疑応答を行い、不十分な点を補足していくことにより深い理解に至るよう努める。			
学生に対する評価の方法 毎回の発表内容（30%）、質疑応答（30%）と、毎回の授業開始時に前回の授業内容からの小テスト（40%）により評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1 回【講義】はじめに（子どもの特徴） 第 2 回【講義】アレルギー総論、アレルギー性鼻炎とアレルギー性結膜炎 第 3 回【講義】気管支喘息 第 4 回【講義】食物アレルギーとアナフィラキシー 第 5 回【講義】アトピー性皮膚炎と子どもの皮膚病 第 6 回【講義】子どもに多い感染症とその取り扱い 第 7 回【講義】若年者で問題となる感染症 第 8 回【講義】食中毒と消化器感染症 第 9 回【講義】集団生活における感染症への予防と対応 第 10 回【講義】成長（身体発育）の評価 第 11 回【講義】肥満と痩せ、生活習慣病 第 12 回【講義】子どもの腎臓病 第 13 回【講義】小児慢性疾患の管理と指導：腎疾患と心疾患を例に 第 14 回【講義】思春期医学 第 15 回【講義】まとめ			
参考書（教科書は特に指定しない） 白木和夫・高田哲「ナースとコメディカルのための小児科学（改訂第4版）」日本小児医事出版社、佐地勉ほか「ナースの小児科学（改訂5版）」中外医学社、奈良間美保ほか「小児臨床看護各論」医学書院、内山聖・安次嶺馨「カラー版 現場で役立つ小児救急アトラス」西村書店、鴨下重彦・柳澤正義「こどもの病気の地図帳」講談社、「学校のアレルギー疾患に対する取り組みガイドライン」日本学校保健会、西間三馨ほか「家族と専門医が一緒に作った 小児ぜんそくハンドブック 2012年改訂版」協和企画、宇理須厚雄・近藤直実「食物アレルギー診療ガイドライン 2012」協和企画、日本学校保健会「児童生徒等の健康診断マニュアル（平成27年度改訂）」、日本小児科学会「思春期医学臨床テキスト」診断と治療社 など			
自己学習の内容等アドバイス 広く医学・医療・健康などに関する知識を持つことは大事であるが、単なる博識に陥ることなく、子どもの発育・発達、病態生理などの基礎知識に裏打ちされた生きた知識の習得を心掛けて欲しい。世間には医学・健康に関する様々な情報が氾濫しているが、それらに惑わされることのない真偽を見極める目を養って欲しい。			

[授業科目名] 小児医学特論Ⅱ		[授業方法] 講義・演習	[授業担当者名] 都築 一夫
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 「小児医学特論Ⅰ」で取り上げたテーマにつき、演習を通してその基本的なスキルを会得し実践することができるようになる。 テーマは「小児医学特論Ⅰ」で学習した、①アレルギー疾患や感染症に対する対処や管理、②成長・発達への支援や健康増進・生活習慣病予防の指導、③慢性疾患を有する小児の日常生活における管理・指導、④思春期における医学的問題の指導と対策 である。			
授業の概要 「小児医学特論Ⅰ」で取り上げた各テーマにつき、実践に即した演習問題を与え、授業時間内にあるいは次回までにレポートとして解答を提出してもらう。			
学生に対する評価の方法 演習で取り上げた問題の解答やレポートにより評価する（100%）。レポートについては単に観念的なものではなく、対策など実行性のある対策が記されているかに重点を置き評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1 回【講義】はじめに 第 2 回【演習】気管支喘息；発作への対応、日常（学校）生活の注意点と長期管理 第 3 回【演習】食物アレルギー、アナフィラキシーの予防と緊急時の対応 －養護教諭・医療保育士の関わり－ 第 4 回【演習】アトピー性皮膚炎と子どもの皮膚病への対応－養護教諭・医療保育士の関わり－ 第 5 回【演習】子どもに多い感染症の事例対応と予防接種－養護教諭・医療保育士の関わり－ 第 6 回【演習】若年者で問題となる感染症の予防と対策 第 7 回【演習】食中毒と消化器感染症の予防と対策 第 8 回【演習】成長曲線とその評価 第 9 回【演習】肥満とやせの評価とその対策 第 10 回【演習】心電図：その判読と不整脈 第 11 回【演習】検尿の実施とその評価 第 12 回【演習】血圧・腎機能の測定とその評価 第 13 回【演習】学校健診の実施に関する演習 第 14 回【演習】思春期の医学的問題点とその指導・対策 第 15 回【講義】まとめ			
参考書（教科書は特に指定しない） 白木和夫・高田哲「ナースとコメディカルのための小児科学（改訂第4版）」日本小児医事出版社、佐地勉ほか「ナースの小児科学（改訂5版）」中外医学社、奈良間美保ほか「小児臨床看護各論」医学書院、内山聖・安次嶺馨「カラー版 現場で役立つ小児救急アトラス」西村書店、鴨下重彦・柳澤正義「こどもの病気の地図帳」講談社、「学校のアレルギー疾患に対する取り組みガイドライン」日本学校保健会、西間三馨ほか「家族と専門医が一緒に作った 小児ぜんそくハンドブック 2012年改訂版」協和企画、宇理須厚雄・近藤直実「食物アレルギー診療ガイドライン2012」協和企画、日本学校保健会「児童生徒等の健康診断マニュアル（平成27年度改訂）」、日本小児科学会「思春期医学臨床テキスト」診断と治療社 など			
自己学習の内容等アドバイス 現実の世界では物事が教科書どおりに運ぶとは限らない。当然、自分の力で解決を図らなければならない。学校教育や幼児保育の業務の中で問題を認識・整理し、更にはそれを解決する（解決への道筋をつける）能力を身につけて欲しい。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
子ども栄養学特論 I		講義	藤木 理代
[単位数]	[必修・選択]	[備考]	
2	選択		
授業の到達目標及びテーマ 子どもの成長と発育を支える栄養を、食べ物・人体・環境の観点から学ぶ。食べ物については、成長期の子どもに必要な食事の内容および食べ方を理解できるようにする。人体については、成長期の身体的特徴・食物アレルギーなどの疾患・運動の役割・適切な生活習慣を理解できるようにする。環境については、子どもの食生活の実態や食育をめぐる家庭および社会状況、支援制度について理解し、子どもの適切な食環境を作るために、家族や社会が果たす役割を理解できるようにする。また、栄養教諭を含む管理栄養士と連携した教育活動を行うために必要な知識や、食育に関する取組みを理解できるようにする。			
授業の概要 人のライフステージの中でも、成長・発達段階にある子どもの栄養問題を考え、教育を行うことは重要である。この授業では、食べ物・人体・環境の観点から、子どもの栄養問題を検討、議論し栄養教育のありかたを学ぶ。			
学生に対する評価の方法 課題（40％）及びレポート（60％）で評価を行う。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1 回 体を作る食べ物・体を動かす食べ物 第 2 回 成長・発育に必要な食べ物 第 3 回 食事と疾患（食物アレルギー） 第 4 回 食事と疾患（小児メタボリックシンドローム） 第 5 回 食事と疾患（拒食症） 第 6 回 母子栄養の現状と課題 第 7 回 離乳食の進め方について 第 8 回 食に関する子育て支援制度について 第 9 回 子どもの食をめぐる現状と課題 第 10 回 学校における食育推進（学校給食を通じた食育の意義） 第 11 回 学校における食育推進（地産地消について） 第 12 回 学校における食育推進の現状と課題 第 13 回 体作りと運動（運動によるエネルギー代謝と骨格筋の形成） 第 14 回 課題発表とディスカッション 1 第 15 回 課題発表とディスカッション 2			
使用教科書 教科書は使用しない。毎回資料を配布します。			
自己学習の内容等アドバイス 各授業のテーマについて、事前に書籍や Web 検索サイトなどで情報を収集し、現状を把握した上で問題提起を行い授業に臨んで下さい(1 時間程度)。授業後は、疑問に思ったことや、更に探求したい事柄について調べ、学習内容の理解を深めましょう(1 時間程度)。			

[授業科目名] 子ども栄養学特論Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 藤木 理代
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 「子ども栄養学特論Ⅰ」で学んだ知識を実践の場で活かすための技術を身につけることを到達目標とする。乳児期・幼児期・学童期それぞれの栄養ケアを実践できるようになる。			
授業の概要 乳児期については、月齢に応じた離乳食の進め方や調理上の工夫の具体例を学ぶ。幼児期については、心と身体を育む食事の工夫を、栄養バランス・おいしさ・親子の絆をテーマに、手作りお弁当やおやつ作りの実例を通して学ぶ。学童期については、栄養教諭や学校栄養職員と連携して食育活動を行なうために必要な知識と技能を様々な実践事例を通して学ぶ。			
学生に対する評価の方法 授業中のプレゼンテーション（50%）及びレポート（50%）で評価を行う。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 母子栄養（乳児期）の現状と課題 第2回 子育て支援の現状と課題 第3回 離乳食の工夫（離乳初期・中期・後期・完了期の食べ物・食べ方） 第4回 離乳食の実践例 第5回 幼児の心と身体を育む手作りお弁当の実例（栄養バランスとおいしさの工夫） 第6回 手作りおやつの工夫 第7回 子どもと家庭（子どもを育む家庭のありかた） 第8回 「食育活動」の意義（何を伝えるのか） 第9回 「食育活動」における効果的な媒体の選択 第10回 「食育活動」の実践事例の検討（テーマ：朝食の大切さについて） 第11回 「食育活動」の実践事例の検討（テーマ：食物アレルギーについて） 第12回 「食育活動」の実践事例の検討（テーマ：身近な食材を使った献立） 第13回 「食育活動」の実践事例の検討（テーマ：学校給食における地産地消） 第14回 「食育活動」のプレゼンテーション 第15回 「食育活動」のプレゼンテーション内容におけるディスカッション			
使用教科書 教科書は使用しない。毎回資料を配布します。			
自己学習の内容等アドバイス 各現場で実施されている活動を事前に調べ、現状を把握した上で問題提起を行い授業に臨んで下さい(1時間程度)。授業後は、疑問に思ったことや、更に探求したい事柄について調べ、学習内容の理解を深めましょう(1時間程度)。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
子どもの社会史特論 I		講義	釜賀 雅史
[単位数]	[必修・選択]	[備考]	
2	選択		
授業の到達目標及びテーマ (テーマ)「歴史に見る生活者としての子ども像 ―近世(江戸中期)～昭和期(戦前)の日本を中心として―」 (到達目標) 子どもを取り巻く環境の変化(子どもに注がれる眼差しの変化)と子どもの生活世界の変容を考察することを通して、より深く「子ども」を理解できるようになる。			
授業の概要 生活者としての子どもは、「遊び」「学び」「働く」子どもである。子ども像を歴史的に追究する場合、子どもに向けられるまなざし＝「子ども観」の変遷を基底に置きつつ、この3つの側面の変容過程を考察することになる。ここでは、ヨーロッパにおける子ども観の変遷を念頭に置きつつ、様々な資料と研究を手掛かりに、近世(江戸時代)そして明治～昭和時代(戦前)の日本における生活する子どものありようを追う。			
学生に対する評価の方法 授業への参画態度(講義内容への興味関心)40%とレポート 60%(計 100%)で評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 ガイダンス(授業の目標、授業計画、運営方法、参考文献などの説明) 第2回 子どもの生活を社会史的に追究することの意味 第3回 資料に見る近世(江戸時代)以前の子ども像 第4回 資料に見る江戸時代の子ども像① 第5回 資料に見る江戸時代の子ども像② 第6回 明治期の日本社会と子ども 第7回 明治期の子どもの生活の風景(子どもにとっての「労働」の位置取り) 第8回 大正～昭和期の日本社会と子ども 第9回 大正～昭和期における子どもに関する言説の考察 第10回 大正～昭和期の子どもの生活の風景 第12回 戦間期の日本社会と子ども 第13回 戦間期の子どもの生活の風景 第14回 これまでのまとめ<戦前の日本における子ども像の変遷> 第15回 更なる学習へのガイダンス			
使用教科書 教科書は使用しない。授業は配布資料・教材にしたがって進める。それぞれ具体的テーマに即してその都度参考図書を紹介する。当講座との関連で一読を薦めたい文献例としては次のものが挙げられる。柴田純『日本幼児史』(吉川弘文館)、江藤恭二監修『子どもの教育の歴史―その生活と社会背景を見つめて―』(名古屋大学出版会)、高橋勝・下田裕彦編著『子どもの<くらし>の社会史』(川島書店)など。			
自己学習の内容等アドバイス 授業時に示される次回の授業で取り上げられるテーマ・話題について、事前に検討しておくこと。			

[授業科目名] 子どもの社会史特論Ⅱ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 釜賀 雅史
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ (テーマ) 「経済社会の構造変化と子どもの生活世界の変容 ―高度成長期以降の日本を中心として―」 (到達目標) 戦後日本の子どもの生活世界のありようを歴史的・社会的に考察することを通して、多面的に「子ども」の理解ができるようになる。			
授業の概要 子どもの社会史特論Ⅰを踏まえ、ここでは特に急激な経済社会の構造変化に伴う子どもの生活の変容に注目する。具体的には、戦後復興期から50年代初期段階の状況を考察するとともに、さらに60年代の高度経済成長期、情報化社会に入った70年代、より高度に情報化・グローバル化が進展する80年代～90年代、現代と、日本社会の変化に伴って、変わっていく子どもの生活(遊び・学び・労働)の全体像を炙り出してみよう。さらに、時間が許せば(日本と対比しつつ)アジアの途上国の経済発展と子どもの生活の変化についても考察する。			
学生に対する評価の方法 授業への参画態度(講義内容への興味関心) 40%とレポート課題60%(計100%)で評価する。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 ガイダンス(授業の目標、授業計画、運営方法、参考文献などの説明) 第2回 戦前期(明治～昭和期)の日本社会と子どもの状況についてのまとめ 第3回 戦後日本の社会の鳥瞰図①(日本社会の構造変化の概観) 第4回 戦後日本の社会の鳥瞰図②(国民生活の変容の概観) 第5回 復興期～高度成長期の子ども①(都市化と生活の近代化と子ども、その全体像のサーベイ) 第6回 復興期～高度成長期の子ども②(子どもの遊びと学びの変容) 第7回 復興期～高度成長期の子ども③(子どもの生活に関する事例) 第8回 70年代後半以降の状況と子ども①(70年代の高校進学率90%に達した年以降の状況) 第9回 70年代後半以降の状況と子どもをめぐる諸問題②(子どもの生活に関する事例) 第10回 情報化社会と子ども①(情報化社会と国民生活の概観) 第11回 情報化社会と子ども②(パソコン、ケータイと子どもの生活) 第12回 情報化社会と子ども③(子どもの生活に関する事例) 第13回 発展途上国の子どもたち①(発展途上国の全体的状況) 第14回 発展途上国の子どもたち② (アジア諸国におけるグローバル化・市場経済化と子どもの生活の変容) 第15回 まとめ			
使用教科書 教科書は使用しない。授業は配布資料・教材にしたがって進める。それぞれ具体的テーマに即してその都度参考図書を紹介する。当講座との関連で一読を薦めたい文献としては次のようなものが挙げられる。高橋勝・下田裕彦編著『子どものくらしの社会史』(川島書店)、江藤恭二監修『子どもの教育の歴史―その生活と社会背景を見つめて―』(名古屋大学出版会)、小針誠『教育と子どもの社会史』(梓出版)など。			
自己学習の内容等アドバイス 授業時に示される次回の授業で取り上げられるテーマ・話題について、事前に検討しておくこと。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
児童比較教育学特論 I		講義	Michelle H. Morrone
[単位数]	[必修・選択]	[備考]	
2	選択		
授業の到達目標及びテーマ 比較教育がどのような学問領域によって構成されるかについて検証する。更に過去に数々の試行錯誤を繰り返した結果、児童比較教育学が如何に同一文化内、或いは異文化間において差異や同一性を生み出し、問題を提起してきたかも紹介し、学際的な比較教育分野の学問的思考を解説し、次に最も関連の深い児童比較教育に分野について視野を広げる。 Various issues regarding comparative education will be introduced for deeper analysis.			
授業の概要 受講生は比較教育学から、社会学、心理学、人類学、政治学及び哲学等に至る内容の文献を読むに従い、児童比較教育の分野が如何に学際的なものであるかについて理解を深める。 更に、特論で得た知識を基に、後期の具体論を討議する児童比較教育学演習に繋げていく。 Final presentation and report in English			
学生に対する評価の方法 最終レポート（60%）、英語でのプレゼンテーション（40%） Written assignments（60%）、Presentation in English（40%）			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1 回 introduction 第 2 回 児童比較教育と国民国家 Cultural identity 第 3 回 児童比較教育と国際社会 Impacting societal issues 第 4 回 児童比較教育と比較文化 Children and the surrounding educational environment 第 5 回 児童比較教育と教育方法 Education and educational policy issues 第 6 回 児童比較教育と経済事情 Other institutional affects on education 第 7 回 児童比較教育と社会事情 Diverse cultures 第 8 回 児童比較教育と国際環境 Social policy among societies 第 9 回 児童比較教育と心情心理 Values and education 第 10 回 児童比較教育と宗教 Pedagogical issues in comparative education 第 11 回 児童比較教育の研究 Varieties of comparative education research 第 12 回 児童比較教育の方法 Research methodology in comparative education 第 13 回 児童比較教育の課題 Focus on children in a new educational milieu 第 14 回 児童比較教育の必要性 Review of influences of culture on children's education 第 15 回 conclusion Presentation and Report			
使用教科書 講義時にテキストを配布する。 参考文献はその都度提示していくので必読のこと。 This course is conducted in English. We will be looking at various research topics in English throughout the semester in order to build up the graduate student's English research base			
自己学習の内容等アドバイス 平素から、異文化や日本以外の教育について、興味をもって考え、議論や論理的な知識をたかめておくこと。 Students are expected to read, discuss, present, and report in English.			

[授業科目名] 児童比較教育学特論Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] Michelle H. Morrone
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 教育環境、教育制度、教育文化などの諸問題を日米の比較を対象として掘り下げて研究することにより、それぞれが現代における子どもの成長にどのような役割を果たしているか、現状の問題を生む要因が何処にあるかを探求していく。 特に日本における保育園と幼稚園の比較分析等を通して、幼保一元化、小幼連携等の問題分析ができるようになる。 Readings will be suggested by the professor based on a continually revised reading list.			
授業の概要 この演習は、児童比較教育分野における今日の問題を調査することに、知的関心を抱く意欲的な院生向けのものである。我が国の児童教育の有様はその歴史文化、政治経済等の多様な社会状況によって構築されてきたものであるが、例えば日本よりも歴史の浅い米国のそれらとの比較を多様な文献、資料を当たることにより、分析していく。 This course is an extension of the first Comparative Education course and exercises intensive reading and research skills.			
学生に対する評価の方法 最終レポート（60%）、英語でのプレゼンテーション（40%） Written assignments（60%）, Presentation in English（40%）			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 紹介 introduction 第2回 児童比較教育とは1－日本教育事情－Japanese Education “uniqueness” 第3回 児童比較教育とは－日米の比較－Focus on US issues in education 第4回 日本と米国の児童教育1－教育方法－Policy issues in early education 第5回 日本と米国の児童教育2－社会・環境－Social realities and education 第6回 日本と米国の児童教育3－習慣・文化 Place for culture/ethnography in education 第7回 日本と米国の児童教育4－PTAの在り方－Example from Japan and the US 第8回 日本と米国の児童教育5－父親の役割と母親の役割 Parental models－international 第9回 日本と米国の児童教育6－コミュニティーとボランティア Community participation issues I 第10回 課題の分析1－制度(保育所と幼稚園) Definitions of Preschool－redefinition? 第11回 課題の分析2－少子化 Social issues in Japan relating to low birth rate 第12回 課題の分析3－教育費 Educational models in perspective 第13回 課題の分析4－ゆとり教育 balancing freedom versus constraint 第14回 課題の分析5－個性 individual and society 第15回 まとめ Final presentations and papers			
講義時にテキストを配布する。 参考文献はその都度提示していくので必読のこと。 English required for this course.			
自己学習の内容等アドバイス 平素から、異文化や日本以外の教育について、興味をもって考え、議論や論理的な知識をたかめておくこと。 High level English highly recommended.			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
子どもケアフィールドワーク		演習	指導教員
[単位数]	[必修・選択]	[備考]	
4	選択	日進市内の保育所、小学校、中学校、附属幼稚園、学部付設子どもケアセンターにおける実践的研究	
授業の到達目標及びテーマ			
各専門分野のフィールド研究の方法論を深く学びながら、院生各自の研究テーマを位置づけることで、新たなフィールド研究の方向性を見出す。			
授業の概要			
<p>修士論文に結びつく課題研究を前提に、本研究科の教育課程を構成する応用研究の5領域毎に、院生一人ひとりが思考する分野の実証、実践的な研究の場として、当該研究科が設置される日進市の中学校、小学校、幼稚園、保育所、医療機関、児童施設及び子育て支援組織等で、実践的・臨床的研究を行う。</p> <p>また、各フィールドにおいて初等教育の臨床的経験・調査、幼児教育における環境構成・児童文化、児童相談の専門的援助活動の現状と課題、医療機関における保育士の必要性などのフィールドで観察を行う。これらの体験を通して、子どものリアルな姿を把握し、子どもケアの実際を理解するとともに、各自の研究課題を探索的に発見することを目指す。発達臨床の立場による乳幼児期の遊びの観察、統合保育・教育の実際、児童への学級や保健室での支援、小中学生における学校カウンセリング・心理療法の実際・虐待等に対する子どもケアセンターの相談の内実や相談の過程を取り上げる中で、院生一人ひとりの子どもケアの在り方について考察する。</p>			
学生に対する評価の方法			
授業中の活動度(40%)、レポート(30%)、フィールドワーク先からの評価(30%)により総合的に評価する。			
授業計画(回数ごとの内容等)			
第1～3回 フィールドワーク先の決定及び研究課題の設定			
第4回～第14回 フィールドワーク先での実践的、実証的研修並びにレポート等の発表と検討			
第15回 フィールドワークについてのまとめ			
使用教科書			
参考文献: ヒューマンケアを考える ―さまざまな領域からみる子ども学― 井形昭弘編著			
自己学習の内容等アドバイス			
フィールドワーク先における現状について理解を深めるとともに、諸問題についても自分なり意見が見いだせるよう、積極的に取り組むこと。			

[授業科目名] アカデミック・ライティング		[授業方法] 講義・演習	[授業担当者名] 齋藤芳子
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考] 初回～第2回の授業で受講者と意見交換をしたうえで、確定版かつ詳細なシラバスを授業中に配布します。	
授業の到達目標及びテーマ 受講者のアカデミック・ライティング技能向上を目的とする授業です。アカデミック・ライティングとは学術的な著述のことです。著述プロセスの各段階における具体的なノウハウを理解すること、ノウハウを適用して著述の修正ができること、責任を持って自分の著述を仕上げられることを到達目標とします。アカデミック・ライティングに対する漠然とした苦手意識や戸惑いを解きほぐしていきましょう。			
授業の概要 アカデミック・ライティングには、形式や作法、問いの設定、文献探索、調査・開発、論理構成、文章表現、研究倫理といった様々な要素があります。受講者には、これらの要素を授業中のミニワークや最終レポート作成を通じて会得し、修士論文作成に役立てることが期待されます。また、意見を出し合うなど受講生間で学びを深めてもらいたいと考えています。			
学生に対する評価の方法 ミニワーク（70%）＋最終レポート（30%） 最終レポートの提出がない場合は「不認定（F）」になります。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 イン트로ダクション：アカデミック・ライティングとは何か 第2回 論文の型 第3回 論理と論証 第4回 問いをたてる 第5回 アウトラインをつくる 第6回 先行文献を探索する 第7回 クリティカル・リーディング 第8回 調査の設計から実施まで（1）量的調査 第9回 調査の設計から実施まで（2）質的調査 第10回 論文における文章と図表 第11回 引用と参照 第12回 アウトラインを充実させる 第13回 論文として整形する 第14回 要旨を書く 第15回 修士論文までを見通す			
使用教科書 教科書は指定しません。適宜資料を Moodle に掲載します。			
自己学習の内容等アドバイス 授業時間外に、各回の宿題（およそ120分）および Moodle 掲載の資料を用いた事前学習（およそ60分）に取り組んでください。 以下の書籍を学習の参考にしてください。これらの他に、授業の中でも随時紹介していきます。 <ul style="list-style-type: none"> 井下千以子（2014）『思考を鍛えるレポート・論文作成法』（第2版）慶應義塾大学出版会。 河野哲也（2018）『レポート・論文の書き方入門』（第4版）慶應義塾大学出版会。 木下是雄（1981）『理科系の作文技術』中公新書。 戸田山和久（2012）『新版 論文の教室－レポートから卒論まで』日本放送出版協会。 西山聖久（2019）『最短ルートで迷子にならない！理工系の英語論文執筆講座』化学同人。 			

[授業科目名] 幼児教育学特論 I		[授業方法] 講義・演習	[授業担当者名] 上田 敏丈
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 本授業では、幼児期の教育について、広く文献輪読を行うことで、テーマに対する概観を行い、そのテーマに対するディスカッションを行う。到達目標は、① 幼児期の教育に関する学術的知見を踏まえて議論できるようになる、②それを元に適切な研究課題をつくることができるようになる、である。			
授業の概要 本授業は、幼児期の教育に関するテーマを設定し、それに関する文献調査と輪読を行い、テーマに基づく先行研究の動向と課題を明らかにすることである。			
学生に対する評価の方法 各回における授業への姿勢と最終レポートによって評価する（授業姿勢 20%、レポート 80%）。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 講義 オリエンテーション 授業の進め方、テーマの設定 第2回 講義・演習 幼児期の教育の背景 第3回 講義・演習 幼稚園教育について 第4回 講義・演習 保育所における教育について 第5回 講義・演習 幼児期の教育における制度 第6回 講義・演習 幼児期の教育における行政 第7回 講義・演習 保育内容 健康領域 第8回 講義・演習 保育内容 言葉領域 第9回 講義・演習 保育内容 表現領域 第10回 講義・演習 保育内容 人間関係領域 第11回 講義・演習 保育内容 環境領域 第12回 演習 テーマに基づく発表 第13回 演習 テーマに基づく議論 第14回 演習 テーマに基づくまとめ 第15回 総合討議			
使用教科書 特になし。適宜、紹介する。			
自己学習の内容等アドバイス 授業外の準備学習が必要となる（各週3時間）。			

[授業科目名] 幼児教育学特論Ⅱ		[授業方法] 講義・演習	[授業担当者名] 上田 敏丈
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>本授業では、幼児教育学特論Ⅰの学修成果を踏まえて、幼児期の教育を対象とした調査・研究を行うための方法論について学ぶ。到達目標は、① 各種の研究手法の特徴と課題を理解できる、② 幼児期の教育に合わせた方法論の選択を行うことができる、である。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>本授業は、幼児期の教育に関するテーマを設定し、それに適切な方法論を身に付けることを目的とする。研究方法に関する文献を輪読しつつ、テーマに合わせた適切な方法論の選択を検討する。</p>			
<p>学生に対する評価の方法</p> <p>各回における授業への姿勢と最終レポートによって評価する（授業姿勢 20%、レポート 80%）。</p>			
<p>授業計画（回数ごとの内容等）</p> <p>第1回 講義 オリエンテーション 授業の進め方、テーマの設定</p> <p>第2回 講義・演習 幼児期の教育における研究方法とは</p> <p>第3回 講義・演習 テーマに合わせた研究手法の選択</p> <p>第4回 講義・演習 定量的手法 アンケート調査</p> <p>第5回 講義・演習 定量的手法 テキストマイニング</p> <p>第6回 講義・演習 定性的手法 質的研究とは</p> <p>第7回 講義・演習 定性的手法 インタビュー調査</p> <p>第8回 講義・演習 定性的手法 KJ法</p> <p>第9回 講義・演習 定性的手法 SCAT</p> <p>第10回 講義・演習 混合手法 TEM/TEA</p> <p>第11回 演習 テーマに基づく調査の検討</p> <p>第12回 演習 テーマに基づく調査の実施</p> <p>第13回 演習 テーマに基づく調査の分析</p> <p>第14回 演習 テーマに基づくまとめ</p> <p>第15回 総合討議</p>			
<p>使用教科書</p> <p>特になし。適宜、紹介する。</p>			
<p>自己学習の内容等アドバイス</p> <p>授業外の準備学習が必要となる（各週3時間）。</p>			

[授業科目名] 子ども文化特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 西村 美佳
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 子どもと文化の関係を視点にして、子どもという存在について考えることが本授業の目的である。文化を受容し、創造し、文化を介して大人と関わる子どもという存在を理解し、今後の子ども文化の方向性を探ることを通じて、現代文化における子ども観を生成することができる。			
授業の概要 本授業では、遊び、メディア、保育、教育、家庭、地域、絵本や漫画・アニメ、消費活動、社会活動など、現代の子どもを取り巻く様々な文化を取り上げ、その中に生きる子どもの存在のあり様を考えるとともに、これからの子ども文化の方向性について、受講者のディスカッションを通じて模索する。			
学生に対する評価の方法 出席及び討論への参加の積極性と課題の遂行度 50% 講義内容の理解度及び発表・レポート 50%			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1回 ガイダンス：授業の進め方と評価の方法について 第 2回 「子ども文化」とは何か 第 3回 内外における子ども文化論の理解① 日本を中心として 第 4回 内外における子ども文化論の理解② 欧米を中心として 第 5回 子ども文化① 児童書や絵本から探る子どもの姿 第 6回 子ども文化② 漫画から探る子どもの姿 第 7回 子ども文化③ テレビアニメから探る子どもの姿 第 8回 子ども文化④ 流行する遊びから探る子どもの姿 第 9回 子ども文化⑤ 廃れていく遊びから探る子どもの姿 第 10回 現代社会における子ども文化① 消費社会と子ども 第 11回 現代社会における子ども文化② 親と子の関係における子ども 第 12回 現代社会における子ども文化③ 祖父母と孫の関係における子ども 第 13回 現代社会における子ども文化④ 地域社会における子ども 第 14回 これからの子ども文化の行方 第 15回 授業のまとめ			
使用教科書 特に指定しない。適宜、資料の配布を行い、参考図書を指示する。			
自己学習の内容等アドバイス 毎回の授業で紹介・提示する文献を読み、各回の授業の内容に関する自己の問題意識を醸成させて授業にのぞむこと。毎回の自己学習時間は 90 分程度と考えている。			

[授業科目名] 保育内容特論 I		[授業方法] 講義・演習	[授業担当者名] 吉葉 研司
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 本授業は、「関係性の発達」をもとに、保育内容における「人的環境」を考えていくことができるようになることが到達目標である。特に幼児の活動を知的な営みととらえたときに重要になる視点が二人称的関係の発達である。また、佐伯胖の「学びのドーナツ論」に参考に、特に領域「人間関係」を中心に、関係性の発達の理論を押さえながら、保育内容を考えることができるように指導を行う。			
授業の概要 保育における「人的環境」とは何か、という問いを念頭に保育内容を考えていく。このため、佐伯胖編著『共感』をテキストにそれを各章ごとに読み込みながら、保育内容との関連を討論していく。			
学生に対する評価の方法 授業への取り組み態度（50%）やレポート（50%）を合算して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 乳幼児期の保育内容における「環境」の必要性（講義） 第2回 「人的環境」とは何か（講義） 第3回 乳児期の人間関係の発達（講義） 第4回 幼児期の人間関係の発達（講義） 第5回 アタッチメントと探索活動（講義） 第6回 二人称の発達とケアの知（講義） 第7回 人間発達の軸としての「共感」（演習） 第8回 「共振」から「共感」へ（演習） 第9回 「共に」の世界を生み出す共感（演習） 第10回 保育の場における保育者の育ち（演習） 第11回 「対話」が支える子ども・保育者・保護者の育ちあい（演習） 第12回 「対話」とは何か（演習） 第13回 学びのドーナツ論（演習） 第14回 保育における「子ども理解」と「評価」（講義） 第15回 まとめ（演習）			
使用教科書 佐伯胖編著『共感』ミネルヴァ書房 <参考文献> ヴァスデヴィ・レディ著『驚くべき乳幼児期の世界』ミネルヴァ書房			
自己学習の内容等アドバイス 事前にレジュメを作成しそれに基づき毎回報告していただきます。 テキストをよく読み、疑問点などをまとめておくようにしてください。			

[授業科目名] 保育内容特論Ⅱ		[授業方法] 講義・演習	[授業担当者名] 吉葉 研司
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ この授業では、保育内容特論Ⅰを踏まえて、保育内容の核となる遊びに関連した種々の文献や園での遊びの実践事例を参考にしながら、「『遊び』を通しての教育」という理念についての理解を深める。また、領域「健康」を一つの例として取り上げ、子ども理解、とりわけ乳幼児の心身の発達を踏まえながら遊びを通しての教育の理念に基づいた指導内容や方法についての考察検討ができるようにする。			
授業の概要 特論Ⅰで行った保育環境論につづき「物的環境」について考察する、モノと関わる関係性の発達、と環境整備の課題や保育の記述について、山本一成著『保育実践へのエコロジカルアプローチ』をもとに考えていく。			
学生に対する評価の方法 教科書や種々の参考文献に関するミニレポート（40%）や期末のレポート（60%）を合算して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回【講義】保育における「物的環境」とは何か 第2回【講義】ダーウィンの進化論について 第3回【講義】ユクスキュルの環境論について 第4回【講義】デューイの経験論について 第5回【講義】アフォーダンスとはどういうことか 第6回【演習】保育環境研究とその課題 第7回【演習】記述される経験の側面性と記述の相補性 第8回【演習】環境の「意味」と「価値」の記述 第9回【演習】「そこにあるもの」のリアリティの探究 第10回【演習】「みんなにとってのヒロシ」との出会い 第11回【演習】「贈与される砂」との出会い 第12回【演習】「気づかれていない命」との出会い 第13回【講義】「自然」を考える 第14回【講義】センス・オブ・ワンダーと幼児教育 第15回【演習】まとめ			
使用教科書 山本一成著『保育実践へのエコロジカルアプローチ』九州大学出版			
自己学習の内容等アドバイス 事前にレジュメを作成しそれに基づき毎回報告していただきます。 テキストをよく読み、疑問点などをまとめておくようにしてください。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
保育内容実践特論		講義・演習	渡辺 桜
[単位数]	[必修・選択]	[備考]	
2	選択		
授業の到達目標及びテーマ この授業では、集団保育における乳幼児の主体的な遊びを保障する環境と援助の相互規定性について、具体的な実践を踏まえながら理解を深めることを到達目標とする。			
授業の概要 前半では、集団保育の意義と困難さについての理解を深めた上で、集団を対象としながら個々に寄り添うという援助を同時進行的に遂行するための環境構成と保育者の身体的援助について、小川博久の遊び保育論を規範理論としながら学ぶ。後半では、集団保育という制度的制約において乳幼児個々の主体的な遊びを保障するための環境や援助の相互規定性について、保育実践映像や実際の保育現場でのエスノグラフィーをもとに仮説生成をしていく。			
学生に対する評価の方法 授業態度(40%)及び課題レポート(60%)で評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 【講義】 イントロダクション 第2回 【講義・演習】 【保育演習室体感授業】 集団保育の意義と困難さ～ストリートプレイとの違い～ 第3回 【講義・演習】 幼稚園教育要領・保育所保育指針に示された保育者の役割と保育者の葛藤 第4回 【講義・演習】 集団保育において乳幼児の主体的な遊びを保障するという事 第5回 【講義・演習】 集団保育において乳幼児の主体的な遊びを保障する環境構成と身体的援助 第6回 【演習】 【保育演習室体感授業】 集団保育において乳幼児の主体的な遊びを保障する環境構成と身体的援助 第7回 【演習】 保育VTRより読み解く集団保育において乳児の主体的な遊びを保障する環境構成と身体的援助 第8回 【演習】 保育VTRより読み解く集団保育において幼児の主体的な遊びを保障する環境構成と身体的援助 第9回 【講義・演習】 理論と実践を結ぶエスノグラフィーという研究方法論 第10回 【演習】 【学外体感授業】 保育実践より読み解く集団保育において乳児の主体的な遊びを保障する環境構成と身体的援助 第11回 【演習】 【学外体感授業】 保育実践より読み解く集団保育において幼児の主体的な遊びを保障する環境構成と身体的援助 第12回 【演習】 保育実践より読み解く集団保育において乳幼児の主体的な遊びを保障する環境構成と身体的援助 エスノグラフィーによる仮説生成 ※以下 【保育演習室体感授業】 第13回 【演習】 保育実践より読み解く集団保育において乳幼児の主体的な遊びを保障する環境構成 第14回 【演習】 保育実践より読み解く集団保育において乳幼児の主体的な遊びを保障する身体的援助 第15回 【講義】 まとめ 集団保育において乳幼児の主体的な遊びを保障する環境構成と身体的援助との相互規定性			
使用教科書 渡辺 桜「子どもも保育者も楽しくなる保育」萌文書林 参考書 志水宏吉編著「教育のエスノグラフィー」嵯峨野書院 小川博久「遊び保育論」萌文書林 吉田龍宏・渡辺桜「遊び保育のための実践ワーク」萌文書林			
自己学習の内容等アドバイス 子どもを主役にする保育について、授業での学びだけでなく自身が出会った文献等と具体的な保育場面とを常に結び付けて考えましょう。1時間程度			

[授業科目名] 保育内容研究演習 A		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 藤井 真樹
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 人間の発達過程を他者との関係性の変容として捉える「関係発達」の理論の考え方・原理、およびその観点から保育内容を考えていくことができるようになることが到達目標である。特に領域「人間関係」を中心に、関係発達論の立場を理解し、自らの研究領域をあらためて問い直すことにより、研究課題への新たな示唆を得ることを目的とする。			
授業の概要 鯨岡峻著『ひとがひとをわかるということ』をテキストにそれを各章ごとに読み込みながら、関係発達論への理解を深める。並行して自らの研究領域の文献講読の発表を行い、関係発達論からの新しい手がかりを得る。			
学生に対する評価の方法 発表を含めた授業への取り組み態度（50%）やレポート（50%）を総合して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション 第2回 関係発達論への導入 第3回 関係発達論とは（1）両義性 第4回 関係発達論とは（2）間主観性・間身体性 第5回 関係発達論とは（3）相互主体性 第6回 ひとがひとをわかることとは 第7回 他者を理解することと他者と「共にある」こと 第8回 大人が子どもを理解することとは 第9回 「主体である」とはどういうことか：子どもが主体であることの意味 第10回 相互主体性の観点から「育てる」ということを考える（1） 第11回 相互主体性の観点から「育てる」ということを考える（2） 第12回 乳児期の相互主体的な関係を事例から考える 第13回 幼児期の相互主体的な関係を事例から考える 第14回 自らの研究領域への関係発達論からの問い直し（1） 第15回 自らの研究領域への関係発達論からの問い直し（2）			
使用教科書 鯨岡峻著『ひとがひとをわかるということ：間主観性と相互主体性』ミネルヴァ書房 藤井真樹著『他者と共にあるとはどういうことか』ミネルヴァ書房 その他、適宜必要に応じて紹介する。			
自己学習の内容等アドバイス 事前にレジュメを作成しそれに基づき毎回報告する。 テキストをよく読み、疑問点などをまとめておくようにしてください。			

[授業科目名] 保育内容研究演習B		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 渡辺 桜
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ この授業では、集団保育における協同的な学びにつながる遊びのメタ意識ならびにメタ意識に関わる援助について、具体的な実践を踏まえながら理解を深めることを到達目標とする。			
授業の概要 前半では、集団保育における協同的な学びにつながる遊びのメタ意識について理解を深める。後半では、集団保育における遊びのメタ意識に関わる環境と援助について、「共同作業」と「理解者」の視点から保育実践映像や実際の保育現場でのエスノグラフィーをもとに仮説生成をしていく。			
学生に対する評価の方法 授業態度(40%)及び課題レポート(60%)で評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 イン트로ダクション 第2回 集団保育における協同的な学びとは 第3回 【保育演習室体感授業】 集団保育における遊びのメタ意識とは 第4回 保育VTRより読み解く集団保育における乳児の遊びのメタ意識 第5回 保育VTRより読み解く集団保育における幼児の遊びのメタ意識 第6回 保育VTRより読み解く集団保育における遊びのメタ意識に関わる 「共同作業」「理解者」としての役割 ～応答・同調を高め響き合う場面～ 第7回 保育VTRより読み解く集団保育における遊びのメタ意識に関わる 「共同作業」「理解者」としての役割 ～自発的な活動場面～ 第8回 【学外体感授業】遊び状況を読み解く視点の当て方・記録の撮り方～保育マップ型記録により全体状況を とらえる試み～ 第9回 【学外体感授業】遊び状況を読み解く視点の当て方 ～乳児の遊びと生活～ 第10回 【学外体感授業】遊び状況を読み解く視点の当て方 ～幼児の遊びと生活～ 第11回 【学外体感授業】遊び状況を読み解く視点の当て方 ～園行事～ 第12回 保育実践より読み解く集団保育において遊びのメタ意識に関わる「共同作業」「理解者」としての役割 エスノグラフィーによる仮説生成 第13回 【保育演習室体感授業】集団保育における「共同作業」「理解者」としての保育者の役割 第14回 【保育演習室体感授業】集団保育における物・人・場の相互作用を支える保育者の役割 第15回 【保育演習室体感授業】まとめ			
使用教科書 渡辺 桜「子どもも保育者も楽しくなる保育」萌文書林			
参考書 小川博久「遊び保育論」萌文書林 河邊貴子「遊びを中心とした保育」萌文書林 吉田龍宏・渡辺桜「遊び保育のための実践ワーク」萌文書林			
自己学習の内容等アドバイス 遊びのメタ意識について自身の日常生活と結びつけて考えてみましょう。1時間程度 指示した次回授業内容について各自予習をし、予習の中で理解できない用語等があれば調べておくこと。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
児童の表現文化特論 I		講義・演習	林 麗子
[単位数]	[必修・選択]	備考	
2	選択		
授業の到達目標及びテーマ 子ども達の表現行動の中で主として動作や身振りまたそのリズム特性から、幼児・児童期の子ども達の表現を理解する。また、戦後教育における身体表現の意味づけを通して、時代の大人たちの教育観や期待を理解する。さらに、子ども達の身体表現の現在と今後の展望について論じることができる。			
授業の概要 子ども達の表現行動の中で主として動作や身振りまたそのリズム特性に関する文献を抄読する。また、戦後教育における身体表現の内容を概観し、時代の大人たちの教育観や期待を探る。さらに、子ども達の身体表現の「今」について、文献・資料を収集するとともに、実際の教育現場に赴き、最終レポートにおいて、各自課題を設定し、総括的に考察する。			
学生に対する評価の方法 授業内でのやり取り（30%）および最終レポート（40%）において講義内容の理解度、子ども達の表現に対する興味や関心、及び研究的視点の有無を評価し、授業への参加態度（30%）を加味して総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回【講義】ガイダンス（授業の概要と目的、スケジュール、評価、教科書・文献の紹介など） 第2回【講義】幼・児童期の発育発達に伴う表現特性（言葉・動作・リズム・音楽や絵画表現）について これまでに得た知識や体験の確認 第3回【講義】「子ども文化の原像」の第2章の講読、考察と意見交換 第4回【演習】主として身体的表現に焦点をあて、幼・児童期の表現特性について文献の抄読 ① 幼児・児童期の自然な表出動作とそのリズム特性 第5回【演習】前回の文献の考察と意見交換 第6回【演習】主として身体的表現に焦点をあて、幼・児童期の表現特性について文献抄読・講述 ② 幼児・児童期の対人コミュニケーション動作・身振り特性 第7回【演習】前回の文献の考察と意見交換 第8回【演習】戦後の幼児教育における身体リズム表現領域の内容（幼稚園教育要領の変遷を概観） 第9回【講義】戦後の児童（小学校）教育におけるダンス表現領域の内容（体育科指導要領の変遷を概観） 第10回【講義】想像的（創作を含む）表現とフォークダンスや現代的リズムのダンスなどの型のある表現の 教育的意味について 第11回【演習】幼稚園や小学校の遊戯会、運動会の見学 第12回【演習】見学・インタビューに対する意見交換と各自のまとめレポート 第13回【演習】子どもたちのからだ表現の今 ― 課題とテーマ決定 第14回【演習】各自の課題テーマに沿って、レポートとプレゼンテーション 第15回【講義】授業のまとめ			
使用教科書 ① 岩田慶治編：子ども文化の原像、日本放送協会、1985 ② 野村・市川編：「技術としての身体」、叢書身体と文化より、大修館書店、1999 ③ 菅原・野村：「コミュニケーションとしての身体」叢書身体文化より、大修館書店、1996			
自己学習の内容等アドバイス 教科書の内容理解からさらに他の資料へ関心を広げ、各自で文献収集ができるとうい。 身近な乳幼児の身振りやしぐさ、乳幼児を取り巻く大人とのコミュニケーションなど、日頃から興味を持って観察できるとよい。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
児童の身体運動教育特論A		講義・演習	森 奈緒美
[単位数]	[必修・選択]	[備考]	
2	選択		
授業の到達目標及びテーマ 1) 子どもの日常生活や学校生活における身体活動の意義や効果について理解できるようになる。 2) 体育授業における身体運動の重要性について理解できるようになる。 3) 子どもの身体活動量と運動強度の測定と評価の具体的な方法を知ることができるようになる。			
授業の概要 子どもの日常生活や学校生活における身体活動量と運動強度を、簡便に数値で知ることにより、客観的に把握する。 体育授業における子どもの運動量・運動強度について探究する。 文献購読等による討議とディスカッションを中心に授業を進める。			
学生に対する評価の方法 授業の課題への取り組み (50%)、授業態度 (20%)、レポート (30%) を総合的に評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第 1 回 【講義】 ガイダンス及び身体運動教育における身体活動量の位置付けと意義 第 2 回 【演習】 子どもの体力低下 第 3 回 【演習】 子どもの運動不足と健康への影響について 第 4 回 【演習】 子どもの日常身体活動量 第 5 回 【演習】 学校生活における身体活動量 第 6 回 【演習】 体育授業の運動量・運動強度について 第 7 回 【演習】 子どもの身体活動量の測定と評価 第 8 回 【演習】 歩数計法による子どもの運動量・運動強度の測定と評価について 第 9 回 【演習】 子どもの 1 日の歩数 第 10 回 【演習】 学校生活における身体活動量の測定と評価について 第 11 回 【演習】 体育授業の運動量・運動強度の測定と評価について 第 12 回 【演習】 体育授業の運動量・運動強度を増加させる工夫について 第 13 回 【演習】 運動の特性と運動量・運動強度について 第 14 回 【演習】 子どもの身体活動量を増加させる工夫について 第 15 回 【講義】 まとめ			
使用教科書 授業の中でプリント等の資料を配付する。			
自己学習の内容等アドバイス 授業で取り上げる内容に関する文献等に目を通し、関心や意見を持って臨むこと。(45分以上) 授業で取り上げた内容を復習し、まとめることにより理解を深める。(45分以上)			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
児童の身体運動教育特論B		講義・演習	森 奈緒美
[単位数]	[必修・選択]	[備考]	
2	選択		
授業の到達目標及びテーマ 1) 児童の身体運動教育における運動領域の特性と意義について理解できるようになる。 2) 表現運動系の「知識及び技能」と具体的な学習指導法について知ることができるようになる。 3) 表現運動系の「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」と具体的な学習指導法について知ることができるようになる。			
授業の概要 児童期の身体運動教育における運動領域の特性と意義について理解する。運動領域のうちの表現運動系を取り上げて、運動課題の実践例を広く知るとともに、表現運動の技能と学習指導法を具体的に学ぶ。文献購読等による討議とディスカッション及び実際の身体運動を交えて授業を進める。			
学生に対する評価の方法 授業の課題への取り組み（50%）、授業態度（20%）、レポート・発表（30%）を総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 【講義】 ガイダンス及び身体運動教育における運動領域の特性と意義 第2回 【演習】 児童期の身体運動教育 第3回 【演習】 運動領域の特性と内容 第4回 【演習】 子どもの身体表現の重要性 第5回 【演習】 表現運動系の内容 第6回 【演習】 表現運動の「知識及び技能」と学習指導 ①題材の捉え方 第7回 【演習】 表現運動の「知識及び技能」と学習指導 ②イメージを動きにする方法 第8回 【演習】 表現運動の「知識及び技能」と学習指導 ③強調・変化をつけたひと流れの動きにする方法 第9回 【演習】 表現運動の「知識及び技能」と学習指導 ④ひとまとまりの動きにして表現する方法 第10回 【演習】 リズムダンスの「知識及び技能」と学習指導の工夫 第11回 【演習】 フォークダンスの「知識及び技能」と学習指導の工夫 第12回 【演習】 作品の発表会を生かした学習指導の工夫 第13回 【演習】 表現運動系の「思考力、判断力、表現力等」と学習指導の工夫 第14回 【演習】 表現運動系の「学びに向かう力、人間性等」と学習指導の工夫 第15回 【講義】 まとめ			
使用教科書 授業の中でプリント等の資料を配付する。			
自己学習の内容等アドバイス 授業で取り上げる内容に関する文献等に目を通し、関心や意見を持って臨むこと。（45分以上） 授業で取り上げた内容を復習し、まとめることにより理解を深める。（45分以上）			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
子ども健康支援特論		講義	西村 美佳
[単位数]	[必修・選択]	[備考]	
2	選択		
授業の到達目標及びテーマ 子どもを健康に育むための様々な支援を、子育て支援や子どもの健康支援に関する実践的取り組みの中から理解し、その中に見られる課題を探り、これからの子どもの健康支援のあり方を導き出すことが出来るようになる。			
授業の概要 本授業では、子育て環境の変化や子育て支援の歴史的変遷を踏まえて、日本における様々な子どもの健康支援の動向、海外における子どもの健康支援に関する資料の講読を行う。特に、現代の子育ての場面において抱えやすい子どもの心身の運動と健康にまつわる問題を幅広く取り上げ、その現状と対策について考察を深め、子育て支援の実践的な課題を見出す。			
学生に対する評価の方法 出席及び討論への参加の積極性と課題の遂行度 50% 講義内容の理解度及び発表・レポート 50%			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1回 ガイダンス：授業の進め方と評価の方法について 第 2回 現代における子どもの健康①：子どもを取り巻く環境 第 3回 現代における子どもの健康②：多様な家族形態における子どもの健康問題 第 4回 現代における子どもの健康③：様々な保育サービスにおける取り組み 第 5回 日本における子どもの健康支援の実際①：歴史的変遷（戦前まで） 第 6回 日本における子どもの健康支援の実際②：歴史的変遷（戦後から現代まで） 第 7回 日本における子どもの健康支援の実際③：行政による取り組み 第 8回 日本における子どもの健康支援の実際④：保育所・幼稚園における取り組み 第 9回 日本における子どもの健康支援の実際⑤：様々な団体における取り組み 第 10回 海外における子どもの健康支援①：アジア各国における取り組み 第 11回 海外における子どもの健康支援②：ヨーロッパを中心に 第 12回 海外における子どもの健康支援③：北欧を中心に 第 13回 海外における子どもの健康支援④：カナダにおける取り組み 第 14回 これからの子どもの健康支援のあり方を探る 第 15回 まとめ			
使用教科書 特に指定しない。適宜、資料の配布を行い、参考図書を指示する。			
自己学習の内容等アドバイス 毎回の授業で紹介・提示する文献を読み、各回の授業の内容に関する自己の問題意識を醸成させて授業にのぞむこと。毎回の授業準備と復習のための自宅学習時間は 90 分と考えている。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
学校保健学特論 I		講義・演習	近森 けいこ
[単位数]	[必修・選択]	[備考]	
2	選択		
授業の到達目標及びテーマ 本講義においては、現場における養護教諭の実際の活動から、その実態と問題を理論的観点から洗い出す。また、研究論文を通して現在の学校保健の動向を理解する。最終的には、保健管理領域および保健教育領域それぞれにおいて理想的な活動のあり方を模索し、実際の活動に適用できるようになる。			
授業の概要 学校現場との接点を大切にしながら、現場の抱える問題を客観的に分析し、よりよい学校保健活動が展開できるように授業を進めていく。授業は講義形式で行う。また、授業後は課題研究（レポート）を提出する。この課題研究は、講義の内容に基づいて提出を義務づける。			
学生に対する評価の方法 討議10%、課題研究（レポート）40%、小論文50%によって総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1 回【講義】 授業のオリエンテーション 授業の目的、講義内容の概要の説明 第 2 回【講義】 学校保健活動の実態①（保健管理領域）対人管理編 第 3 回【講義】 学校保健活動の実態②（保健管理領域）対物管理編 第 4 回【講義】 学校保健活動の実態③（保健教育領域）保健学習編 課題研究（1） 第 5 回【講義】 学校保健活動の実態④（保健教育領域）保健指導編 第 6 回【講義】 健康教育の基盤となる学習理論① 健康信念モデル、自己効力感、変化のステージ 課題研究（2） 第 7 回【講義】 健康教育の基盤となる学習理論② 計画的行動理論、ストレス対処、社会的支援 コントロール所在 第 8 回【演習】 主な学習理論の現場への応用方法 第 9 回【講義】 介入研究に関する研究論文① 栄養指導に関する研究 第 10 回【講義】 介入研究に関する研究論文② 運動実施に関する研究 第 11 回【講義】 介入研究に関する研究論文③ 喫煙・飲酒・薬物等に関する研究 第 12 回【演習】 子どもの健康実態把握の仕方についての検討 課題研究（3） 第 13 回【講義】 学校保健活動のあり方① 保健管理領域 第 14 回【講義】 学校保健活動のあり方② 保健教育領域 第 15 回【講義】 まとめ、小論文提出			
使用教科書 テキストは使用しない。授業中にプリントを配付する。			
自己学習の内容等アドバイス 学校保健の活動は幅広い領域に及んでおり、運営はさまざまな職種の人たちが担っている。どの領域もその成果をあげるためには重要である。まずは学校保健のしくみを理解し、そこで起こる問題点については、学術雑誌あるいは研究誌を読み、予め問題意識をもって講義に臨むことを期待する。			

[授業科目名] 学校保健学特論Ⅱ		[授業方法] 講義・演習	[授業担当者名] 近森 けいこ
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ この授業においては、学校保健の中でも保健教育領域に着目し、分野別に養護教諭が行う保健学習・保健指導の効果的な進め方について事例を通して検討し、実際に指導案・使用する資料等を作成する。また同時に、学校保健に関わるさまざまな職種の人々が協力し合って、子どもたちにどう働きかけたらよいかについても検討する。			
授業の概要 特論で学習した内容を踏まえ、幅広い学校保健活動（とりわけ保健教育の領域について）をスムーズに進めていくための具体的な方法について検討する。通常は、模擬授業や指導案・資料作成などの演習を行いながら学校保健活動全般について理解を深めていく。また、課題研究（レポート）を課す回もあるので、準備すること。			
学生に対する評価の方法 討議10%、課題研究（指導案・レポート）40%、作成した教材・指導案50%によって総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回【演習】 学校保健活動の実態および評価の事例① 保健管理の中で 第2回【演習】 学校保健活動の実態および評価の事例② 保健教育の中で（保健学習） 第3回【演習】 学校保健活動の実態および評価の事例③ 組織活動の中で 第4回【演習】 学校保健活動の実態および評価の事例④ その他の機会 第5回【演習】 効果的な保健教育のあり方の検討① 学級活動の指導の中で 課題研究（1） 第6回【演習】 効果的な保健教育のあり方の検討② 個別の保健指導の中で 第7回【演習】 効果的な保健教育のあり方の検討③ 学校行事の指導の中で 第8回【演習】 保健教育の進め方①「環境衛生検査」「環境の安全」など 課題研究（2） 指導案・教材（1） 第9回【演習】 保健教育の進め方②「健康状態評価」など 指導案・教材（2） 第10回【演習】 保健教育の進め方③「疾病管理」「安全管理」など 指導案・教材（3） 第11回【演習】 保健教育の進め方④「校内および校外生活の管理・指導」など 指導案教材（4） 第12回【演習】 保健教育の進め方⑤ その他 指導案・教材（5） 第13回【演習】 学校保健活動を支える組織の再検討 第14回【演習】 学校保健委員会の在り方の再検討 第15回【講義】 これからの学校保健活動、まとめ 課題研究（3）			
使用教科書 テキストは使用しない。授業中にプリントを配付する。			
自己学習の内容等アドバイス より効果的な学校保健活動を目指すには、前年度までの評価に基づいて年間計画を立てる必要がある。本演習第1～4回で評価の進め方について十分に復習して理解すること。その上で幅広い学校保健活動の中で具体的にどのような評価法を用いているのか検証していく予定である。			

[授業科目名] 健康教育学特論 I		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 近森 けいこ
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 学校における健康教育の概念、保健教育（保健学習・保健指導）の進め方、多様な指導方法およびそれらを支える理論について理解することができるようになる。			
授業の概要 本特論は、学校における健康教育の基本的な考え方、ヘルスポモーション（ヘルスポモーションスクール）について理解を深めるとともに、保健教育（保健学習・保健指導）保健管理、保健組織活動のそれぞれの分野の関連性や理論に基づいた多様な指導方法について総合的に理解する。			
学生に対する評価の方法 ・授業態度（課題レポートの提出、討議等）50% ・試験 50%			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1 回【講義】 オリエンテーション 授業の目的、講義内容の概要の説明、進め方についての説明 第 2 回【講義】 健康教育の基本的な考え方、学校における健康教育の法的根拠（関係法規の概要） 第 3 回【講義】 ヘルスポモーションスクール、学校におけるヘルスポモーションの進め方 第 4 回【講義】 教科等（保健学習）における健康教育に関する学習指導要領の指導内容 第 5 回【講義】 特別活動における保健指導計画の立案・実施・評価方法 第 6 回【講義】 健康観察、健康相談及び保健指導における学校保健安全法の理解 第 7 回【講義】 保健組織活動における健康教育（学校・家庭・地域との連携） ➡目的、運営及び指導方法、組織マネジメント 第 8 回【講義】 児童生徒の心身の健康問題への対応① アレルギー、肥満 第 9 回【講義】 児童生徒の心身の健康問題への対応② メンタルヘルス 第 10 回【講義】 児童生徒の心身の健康問題への対応③ 喫煙、飲酒、薬物乱用 第 11 回【講義】 学校における健康教育の進め方① 学校保健計画、学校安全計画 第 12 回【講義】 学校における健康教育の進め方② 保健室経営計画等 第 13 回【講義】 海外における健康教育の動向 第 14 回【講義】 わが国における健康教育の動向 第 15 回【講義】 学習のまとめ			
使用教科書 「学習指導要領解説（保健・特別活動）」、「健康教育 ヘルスポモーションの展開」（保健同人社）、「保健室経営計画の手引」（財）日本学校保健会、必要に応じて資料配付する。			
自己学習の内容等アドバイス ・保健の学習指導要領解説（小・中・高等学校）の内容及び系統性を理解するとともに、関連教科の内容についても把握しておくこと。 ・現代的な健康課題の現状と課題を把握するために、文部科学省等が出版している各種統計資料や報告書・手引書をよく読んで概要を理解しておくこと。			

[授業科目名] 健康教育学特論Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 近森 けいこ
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>健康教育を推進する上で必要な指導計画及び評価方法について理解を深めるとともに、具体的な問題解決型の指導案や教材等を作成し、模擬授業を実施し、さらに再計画をすることでよりよい授業を模索し、実践することができる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>健康教育学特論Ⅰの授業を踏まえて、学校保健計画等の作成、保健学習及び学級（HR）活動における保健指導の指導案及び教材の作成、模擬授業の実施、学校保健委員会の企画・運営等について実践的な演習を行い、健康教育の手法や技術を習得し実践力及び指導力を高める。</p>			
<p>学生に対する評価の方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業態度（課題の成果物（指導案、計画、運営案等）） 30% ・ 模擬授業、プレゼン等の評価 40% ・ 授業態度（積極性、発言等） 30% 			
<p>授業計画（回数ごとの内容等）</p> <p>第 1 回【講義】 オリエンテーション 授業の目的、授業内容の概要説明、進め方についての説明</p> <p>第 2 回【講義】 学校保健計画と評価</p> <p>第 3 回【講義】 学校安全計画と計画</p> <p>第 4 回【講義】 食に関する指導</p> <p>第 5 回【演習】 指導案及び教材の作成と模擬授業① 保健学習の指導案作成</p> <p>第 6 回【演習】 指導案及び教材の作成と模擬授業②-1 保健学習の模擬授業実施と協議</p> <p>第 7 回【演習】 指導案及び教材の作成と模擬授業②-2 保健学習の模擬授業実施と協議</p> <p>第 8 回【演習】 指導案及び教材の作成と模擬授業③ 保健指導の指導案作成</p> <p>第 9 回【演習】 指導案及び教材の作成と模擬授業④ 保健指導の模擬指導実施と協議</p> <p>第 10 回【演習】 個別の保健指導① 保健指導計画の立て方</p> <p>第 11 回【演習】 個別の保健指導② 指導の実際と評価</p> <p>第 12 回【演習】 児童生徒保健委員会の指導 活動計画および運営方法</p> <p>第 13 回【演習】 学校保健委員会の企画・運営① 議題の選定、企画、運営案、事前活動及び事後措置</p> <p>第 14 回【演習】 学校保健委員会の企画・運営② 運営案の作成とその評価</p> <p>第 15 回【講義】 学習のまとめ</p>			
<p>使用教科書</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学習指導要領解説小・中・高等学校（保健・特別活動） ・ 必要に応じて資料配布する。 			
<p>自己学習の内容等アドバイス</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学校保健計画の作成及び評価計画の作成、保健室経営計画の作成及び評価計画の作成、保健学習指導案の作成、学級活動における保健指導案の作成、学校保健委員会の計画、運営案の作成、これらについて原案を作成するので、各自でテーマを決めてシミュレーションしておくこと。 ・ 保健学習、学級活動における保健指導の評価計画の作成に当たっては、国立政策研究所の「評価規準作成のための参考資料」を活用すること。 			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
学校看護学特論		講義	浅野 妙子
[単位数]	[必修・選択]	[備考]	
2	選択		
授業の到達目標及びテーマ 養護教諭はけがをした本人とだけ対応するのではなく、周りにいる他者（担任、教頭など管理者、保護者等）とのコミュニケーションやインフォームドコンセントをしながら判断し、対応を決定し、救急処置・看護を行っていることを事例から学ぶ。さらに、時間の経過とともに問題は変化し、救急処置や看護は変わっていき、医療機関へ搬送するまでの処置ではなく、学校生活を円滑に過ごせるようにしながら、治癒するまで経過観察を行っていることを理解する。			
授業の概要 学校はさまざまな健康状態にある児童生徒のけがや疾病異常の発生に対応している。時には慢性疾患を抱えた児童生徒や医療的ケアが必要な児童生徒の急変に対しても、適切な救急処置・看護が出来るようにあらかじめ処置計画を立てて準備する必要性等を学校看護学の中の学校救急看護活動について講義する。			
学生に対する評価の方法 授業参加態度（自分の意見を述べる、他者の発表に自分の意見を述べる事が出来る） 20% 中間発表 30% およびレポート 50% により評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 学校救急看護/救急処置とは 第2回 学校における救急事例の実態 第3回 救急事例に関わる対象者（傷害・疾病の急変の本人、本人をとりまく、友人、保護者、担任、校長などの管理者、医療関係者等 それぞれの特性・条件） 第4回 救急事例の判断から救急処置・看護、治癒するまでの過程 第5回 救急事例の判断について（事実判断、価値判断など） 第6回 1)（症状が中心） 2) 医学的・医事的判断 第7回 3) 非医学的・非医事的判断（症状以外のもの 学校生活、経済的、宗教的等） 第8回 4) 事例の事実の解釈や問題点を明らかにする（対象者が事実をそれぞれに解釈し、問題点を明らかにする） 第9回 5) 問題点から対応を決定（救急車要請、受診、帰宅等、問題点は時系列で変化し対応が変わる） 第10回 6) 救急処置から治癒するまで救急処置・看護、保健指導、経過観察をする 第11回 学校救急看護体制（救急処置・看護計画） 1) 校内・校外の連絡体制 2) 救急薬品や衛生材料、施設・設備の準備 3) 現職教育 第12回 学校救急看護とコミュニケーション過程 第13回 学校救急看護とインフォームドコンセント 第14回 学校救急看護と安全教育 第15回 まとめ			
使用教科書 必要に応じて資料を配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 現場での救急事例の判断や対応と専門書に記載されている理論とのズレ・差異について追究する。追求するために必要な文献や資料を受講前に収集し、正しく読み、自らの意見を整理する。受講後、生じた疑問や問題点について調べ、まとめる。			

[授業科目名] 学校看護学演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 浅野 妙子
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 看護はあらゆる健康水準の人々を対象によりよい健康状態を目指した看護援助を提供している。看護活動の場として臨床看護、学校看護、地域看護、産業看護等がある。この演習では児童生徒を対象とした学校看護に焦点をあてながら、傷病予防の観点および傷病で通院しているケース、慢性疾患（アレルギー疾患、心疾患、代謝性疾患等）を抱えているケース、医療的ケアを必要としているケース等さまざまな健康水準の児童生徒を対象とした観点から、順調な成長発達を支援・促進し、学校看護の視点から円滑で成果のみえる看護活動を行っていくことについて学ぶ。			
授業の概要 学校看護における具体的な看護援助の基本となる、「①教える、導く・育てる等保健教育、保健指導」、「②見守る、保護する等傷病のケア」、「③苦痛を和らげ、安楽を与える、それ以上悪化させないよう救急処置を行う」について事例等を通して学修する。			
学生に対する評価の方法 各自分担した項目をまとめ、レポート作成（40％）に基づいて発表（20％）を行う。 授業参加態度（40％）により総合的に評価する			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 看護の理論や概念について 第2回 学校看護とは、看護の歴史の中の学校看護 第3回 看護・福祉の倫理および学校看護の倫理綱領 第4回 学校看護の援助活動について 1) 健康の保持増進、傷病の予防的な観点から 第5回 学校看護の援助活動について 2) 救急看護活動と安全 第6回 学校看護の援助活動について 3) 日常起こりやすい傷病 第7回 学校看護の援助活動について 4) 慢性疾患を抱えた児童生徒の看護 第8回 学校看護の援助活動について 5) 火災・地震などの災害 第9回 学校看護の援助活動について 6) 医療的ケアを必要とする子どもへの援 第10回 学校看護の援助活動について 7) 慢性疾患児へのケア（アレルギー疾患、ぜんそく、心疾患等） 第11回 基本的看護援助・ケアの技術（1）基本的な看護援助技術 第12回 基本的看護援助・ケアの技術（2）コミュニケーション、アセスメント技術 第13回 外傷救急処置援助（1）創傷処置 第14回 外傷救急処置援助（2）救命処置 第15回 まとめ			
使用教科書 必要に応じて資料を配布する			
自己学習の内容等アドバイス さまざまな健康水準の児童生徒の健康課題にどのような援助を行うが、具体的な事例を収集して討論し、養護教諭の養護活動について総合的な判断力と実践力を身につけることを目指す 受講前に必要な文献や資料を収集し、正しく読み、自らの意見を整理する。 受講後、生じた疑問や問題点について調べ、まとめる。			

[授業科目名] 発達看護学特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 浅野 妙子
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 看護はその対象者である人を人間生涯発達の視点でとらえている。 本講義では、ライフステージの各期における共通性と特異性を理解して、小児期における人の成長発達および発達段階について学び、対象の理解を深めるとともに、一人一人の個別性と必要とされる看護を通して、学校教育の円滑な実施とその成果の確保に資する発達看護学について探究する。幼児から児童生徒（以下「子ども」とする）を対象に、看護の機能である看護技術、相談的対応機能、教育的対応機能について学修する。			
授業の概要 看護の対象は新生児から高齢者まで幅広い。人はそれぞれの発達段階において、その時期特有の課題を持ち、課題の解決を試み、発達危機を克服しようとしている。看護の役割として重要なものの一つに、その途上において遭遇するさまざまな傷害や疾病等の状況危機の克服と適応を支援することがある。具体的な看護援助の本質は①教える、導く・育てる等保健教育、保健指導 ②見守る、保護する等傷病のケア③ 苦痛を和らげ、安楽を与える、それ以上悪化させないよう救急処置を行う等が挙げられる。ここでは対象を幼児から児童生徒に重点をおき、その発達看護学について学修する。			
学生に対する評価の方法 事前事後レポート（40%）授業参加態度（40%）プレゼンテーション（20%）により評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 人のライフサイクル、発達課題 第2回 生涯発達とは 成長発達とは 第3回 対象の発達の視点と評価 1) 形態的・身体的側面 第4回 対象の発達の視点と評価 2) 認知的側面 第5回 対象の発達の視点と評価 3) 心理・社会的側面 第6回 傷病体験から心身面の変化どう認知しているか 第7回 1) 傷病に伴うさまざまな痛み・苦痛をどのように感じ表現しているか 第8回 2) 創傷の体験をどのように認知しているか（年齢別にみる） 第9回 3) 疾病抱えた子どもは自分の心身をどのように認知しているか ① 感染症等日常的な疾患 第10回 ②アレルギー疾患、心疾患等慢性疾患を抱えた子ども 第11回 ③入院を体験した・している子どもは受けた検査や処置・看護をどう捉えているか 第12回 子どもを対象とした看護の役割 成長・発達への支援、家族機能 第13回 個々の子どもの発達に対応した看護の基本的援助技術 1) 基本的な日常生活習慣（感染予防、清潔、排泄、食事など） 第14回 2) 発熱、嘔吐、救急薬品など使い方頭痛・腹痛、気分不良・嘔吐等の症状の看護 第15回 まとめ			
使用教科書 必要に応じて資料を配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 心身ともに成長、発達していく子どもたちを人のライフサイクルの視点から理解し、各ステージにおける発達課題を検討しつつ、学修を進める。 受講前に必要な文献や資料を収集し、正しく読み、自らの意見を整理する。 受講後、生じた疑問や問題点について調べ、まとめる。			

[授業科目名] 発達看護学演習		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 浅野 妙子
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 小児期における人の成長発達および発達課題について学び、一人一人の個別を含めた対象の理解を深めるとともに、成長発達を支援する発達看護の視点から必要とされる看護援助について学ぶ。			
授業の概要 看護の対象は新生児から高齢者までと幅広い。この演習では対象を幼児から児童生徒（以下、子どもとする）までに限定し、子ども達の健康保持増進および順調な成長発達を促すための看護援助について学ぶ。さらに、けがをしたり、急病になったり、慢性疾患を抱えていたり、医療的ケアを必要としたり、入院を余儀なくされる、などの状況にある子ども達の理解と看護援助および支援について考える。これらの状況にある子どもに関連した事例や文献から学び、議論をすすめる。			
学生に対する評価の方法 事前事後レポート（40%） 授業参加態度（40%） プレゼンテーション（20%）により評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1～5回 看護雑誌などの文献から疾病をもった子ども達が疾病についてどのように理解・認知しているか、どのような治療・看護を受けているか明らかにする。 アレルギー疾患・心疾患・糖尿病を持つ子ども、医療的ケアを必要としている子どもなど。同じ疾患でも年齢により、症状によって治療・看護が異なることを理解する。子どもたち自らがどのようなことをしているか明らかにする。 第6～10回 幼稚園、学校にいる子どもを対象に分担して面接を行い、けがをしたり病気になったときの自分の心身の状態、治療の経過をどのように理解・認知しているか明らかにする。 1) 創傷・骨折などの経験がある子ども ＊上記の者を対象に、治癒するまでどのように症状が変わり、どのような処置・看護を受けたか、自分では何をしたら 学校生活をおくる上で配慮したことなど治癒するまでの事例を収集する。 2) 慢性疾患を抱えている子ども 1) ＊と同様 3) 幼児から高校生まで同じような病気に（感冒などの感染症）罹患した子どもに発病から治癒するまでの症状の変化、治療の様子等を聞きまとめる。病気の理解、認知や看護したこと・してもらったこと、自分で出来ることなど、発達段階によって異なることを理解する。 第11～13回 文献で明らかになったことをまとめ、情報を共有し検討する。 第14回 発表 第15回 まとめ			
使用教科書 必要に応じて文献・資料を配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 疾病をかかえる子ども等の学校保健・看護文献及び新聞等の記事から発達看護の視点の支援について考えることができるように学修を進める。 受講前に必要な文献や資料を収集し、正しく読み、自らの意見を整理する。 受講後、生じた疑問や問題点について調べ、まとめる。			

[授業科目名] 養護実践学特論 I		[授業方法] 講義・演習	[授業担当者名] 遠山 久美子
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 授業のテーマは、「養護教諭とは」「養護教諭の実践とは」を多角的に追求し考察することである。種々の資料の読みとりと批評を通じて、受講者各自の「養護教諭観」を形成することを到達目標とする。			
授業の概要 養護教諭の歴史、「養護教諭の職務」、「養護教諭論」の変遷などに関する資料（成書や公的文書・審議会答申など）を収集し、それらに表れた著者（研究者、実践者、市民）の「養護教諭観」を読みとる。これらの素材の読みとりと討議を通じて、受講者各自の「養護教諭観」を形成する。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度（10%）、課題レポート（40%）、総括レポート（50%）で総合的に評価を行う。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 【講義】 ガイダンス 授業の目的と講義内容の概要、参考書の紹介、授業日程の説明 第2回 【講義】 養護の基本原則、養護の目的と機能、教育における養護 第3回 【講義】 養護教諭の専門性（専門性の考え方、養護教諭の存在意義と歴史） 第4回 【講義】 「養護教諭論」の変遷①養護教諭の活動と関連法規 第5回 【講義】 「養護教諭論」の変遷②学校保健の領域構造と養護教諭の活動 第6回 【講義】 「養護教諭論」の変遷③養護教諭の役割・機能 第7回 【演習】 「養護教諭の職務」に関する読みとりと批評・討議①保健室経営 第8回 【演習】 「養護教諭の職務」に関する読みとりと批評・討議②保健管理 第9回 【演習】 「養護教諭の職務」に関する読みとりと批評・討議③保健教育 第10回 【演習】 「養護教諭の職務」に関する読みとりと批評・討議④健康相談 第11回 【演習】 「養護教諭の職務」に関する読みとりと批評・討議⑤保健組織活動 第12回 【演習】 「養護教諭論」関連資料の読みとりと批評・討議①「普遍的養護教諭観」 第13回 【演習】 「養護教諭論」関連資料の読みとりと批評・討議②「時代のニーズに応じた養護教諭観」 第14回 【演習】 課題レポート「私の養護教諭観」発表と討議 第15回 【講義】 まとめ			
使用教科書 必要に応じて参考資料を紹介・配布する			
自己学習の内容等アドバイス 1. 「養護教諭の職務」、「養護教諭論」などの関連資料はできる限り広範囲にわたって収集すること。 2. 関連資料は著者自身が文章化したもののほか、聞き取りなどのオリジナルデータも含める。 3. 事前学習・復習（疑問点・意見等）に1時間程度を充てる。 4. 授業計画は、授業の進行状況により前後することがある。			

[授業科目名] 養護実践学特論Ⅱ		[授業方法] 講義・演習	[授業担当者名] 遠山 久美子
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 養護教諭の専門性や果たすべき役割について理解を深め、養護教諭に求められる実践力の向上を図るとともに、学究する姿勢を体得することができるようになる。			
授業の概要 養護実践に関する文献検索・調査研究・レポート発表を行い、養護教諭の職務・専門性や健康課題解決のための養護実践について討議する。その過程で養護教諭に求められる役割について考察を深め、実践力の向上と学究する姿勢を養う。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度（10%）及び課題レポート（40%）、総括レポート（50%）で総合的に評価を行う。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 【講義】 ガイダンス 授業の目的と講義内容の概要、参考書の紹介、授業日程の説明 第2回 【講義】 養護教諭の職務と専門性（歴史的理解・アイデンティティ） 第3回 【演習】 養護教諭の職務と専門性に関する討議 第4回 【講義】 現代的健康課題 第5回 【演習】 健康課題解決のための方策に関する討議 第6回 【演習】 養護実践に関する事例発表・討議（保健室経営） 第7回 【演習】 養護実践に関する事例発表・討議（保健管理） 第8回 【演習】 養護実践に関する事例発表・討議（保健教育） 第9回 【演習】 養護実践に関する事例発表・討議（健康相談） 第10回 【演習】 養護実践に関する事例発表・討議（保健組織活動） 第11回 【講義】 養護実践の目標と評価（PDCA） 第12回 【講義】 養護教諭と研究（養護実践と実践研究） 第13回 【演習】 養護実践論発表と討議 第14回 【演習】 これからの養護教諭論発表・討議 第15回 【講義】 まとめ			
使用教科書 必要に応じて資料を紹介する。			
自己学習の内容等アドバイス 1. 養護実践の事例は、書籍・雑誌等のほか、学会・研究会や地区での実践発表収録等からも収集することが望ましく、できる限り広範囲にわたって収集すること。 2. 事前学習・復習（疑問点・意見等）に1時間程度を充てる。 3. 授業計画は、授業の進行状況により前後することがある。			

[授業科目名] 発達心理学特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 黒田美保
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 「人はどのように発達するか」をテーマに授業を進め、発達に関するより深い知識を習得すると同時に、実際に子どもを観察し、発達と障害について理解し、臨床で活かすことができるようになることが到達目標である。			
授業の概要 生涯発達の視点、及び学校教育の視点から発達を胎児期から青年期までを学習する。発達過程において、子どもを取り巻く環境（家庭、学校、社会など）が発達にどのように影響しているのかについても学習する。さらに、現在、社会的問題となっている虐待や不登校、引きこもり、発達障害児等の問題に関しても取り上げ、最近の研究論文や今まで研究してきた実際のデータや事例を使用しながら発達に関する理解度を深める。			
学生に対する評価の方法 各発達段階が終わった時点で課題を出す。課題に対してレポートを提出（6回程度）。評価する観点はレポートの内容やまとめ方、さらに、感想だけでなく意見やコメントも書いているかに注目して評価（70%）、及び授業活動態度・発表（30%）で評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション（授業の進め方、評価等）。学校教育において学校心理士として、生涯発達の視点から、さらに、学校教育との関連から発達を考える。授業外での子ども観察について説明 第2回 発達理論、発達の要因、発達課題など基礎的知識を学習する。 第3回 発達の研究方法（実験、観察、調査、各種検査等）について先行研究を紹介しながら学習する。 第4回 胎児期の発達（身体・運動の発達）について学習し、障害児の要因について学習する。 第5回 乳児期の発達（知覚、認知、情動の発達等）、母子関係（愛着理論など）を学習し、養育態度の影響と障害について学習する。ーレポート提出①ー 第6回 幼児期前期の発達について、ピアジェ理論を理解しながら認知（言語・遊びなど）、及び社会性（仲間関係）の発達を中心に学習する。 第7回 幼児期後期の発達について、特に社会性の発達（心の理論、向社会的行動、攻撃的行動、道徳等）と障害及びいじめなどについて学習する。ーレポート提出②ー 第8回 障害の種類と特徴について、特に障害児について基礎的知識と発達査定、学校における教育的支援サービスについて学習する。ーレポート提出③ー 第9回 障害児の社会性の発達と学校生活について学習し、親子関係や発達障害児についても学習する。 第10回 児童期の発達と学校生活について学習する。特に、学校生活における社会性（仲間関係、教師との関係等）の発達、自己意識の発達及び不登校について学習する。ーレポート提出④ー 第11回 発達と教育について学習。学校生活における学習と教育的援助（ヴィゴツキー理論など）、仲間関係（コミュニケーションと社会的スキル等）について学習する。 第12回 青年期の発達について、自立をキーワードにエリクソンの自我発達理論を理解し、自己意識や自尊感情、アイデンティティ、自己実現について理解する。ーレポート提出⑤ー 第13回 青年期の障害と進路及び社会生活について健常児と障害児の進路、職業選択を中心に、さらに、自立と親子関係について学習する。ーレポート提出⑥ー 第14回 教育的援助について、特に、家庭、地域の視点から何ができるか事例から理解する。 第15回 教育的援助について、特に、学校、福祉、医療の視点から何ができるか事例から理解する。 授業外で観察した子どもについて発表・討論			
使用教科書 シリーズ 新・臨床発達心理学 第4巻 社会・情動発達とその支援			
自己学習の内容等アドバイス シラバスに従って、予習・復習及び授業外での子ども観察をしっかりしてほしい。 授業を通して、子どもの心身の発達の知識を習得し、子どもの発達を促進するためにどのような支援ができるかを考える力をつけてほしい。			

[授業科目名] 発達心理学演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 黒田美保
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 「発達の特権になる」ことを目標とし、子どもの発達をより深く学習し、社会的に問題となっている子どもの様々な問題と子どもを取り巻く環境（家庭、学校、地域、対人等）についての幅広い知識を現場で役立てることができるようになることが到達目標である。			
授業の概要 発達心理学特論で学習した知識をさらに深めて発達心理学に関する専門性を研鑽していく。専門性を高めるために、社会的に問題となっている様々な子どもの問題等を子育て支援の観点と関連させながら全員がそのテーマを共有し討論していく。又、受講者は、前期に引き続いて実際に子どもを観察し、授業で発表するなどして幅広い知識を学習し、現場で即戦力となるような力を習得する。			
学生に対する評価の方法 評価は、授業中の活動態度（30%）と課題や先行研究論文の発表（30%）とそのまとめをレポートとして提出（40%—内容とまとめ方など）で評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション。授業についての概要及び評価について説明。学生から修士論文に関する情報を得る。前期に引き続き、実際に子どもを観察することについて説明 第2回 発達心理学、臨床心理学などからの子育て支援について意見発表と全体で討論 第3回 社会性の問題を発達と子育て支援との関連について考え、全体で討論 第4回 子どもの保育場面などでの行動観察の方法をビデオ使い具体的に学ぶ 第5回 子どもの発達をみる行動観察の方法をビデオ使い具体的に学ぶ、実際に子どものアセスメントに陪席する場合もある 第6回 発達心理学に掲載されている先行研究から選択し、研究論文の読み方や書き方について学習する。 第7回 前回選択した論文を受講者一人が1編を読み、発表し全体で討論。発表者は発表後レポートとして提出 第8回 前回選択した論文を受講者の一人（前回とは別の学生）が1編を読み、発表し全体で討論。発表者は発表後レポートとして提出（発表者は回ごとに異なる） 第10回 海外の発達研究に関する論文を紹介し、海外の論文の探し方や読み方について学習する。 第11回 受講者は修士論文のテーマに関する研究論文を検索し読む。 第12回 論文（できれば海外の論文）について発表し、発表後レポートとして提出 第13回 別の受講者が論文を発表し、発表後レポートとして提出 第14回 研究方法（データ収集、分析、統計など）について指導 第15回 修士論文に向けての話し合い。論文を書くにあたっての情報（アドバイス等）を提供する			
使用教科書 なし 研究論文の提供は発達心理学研究（国内）や海外ジャーナルより選択し提供する。			
自己学習の内容等アドバイス 予習・復習として先行研究の論文を読みレポートとしてまとめて発表してほしい。又、実際に子どもを観察することによって子どもについて深く理解するよう努めること。 修士論文で何を研究したいのかを明確にするため、それに関連する多くの先行研究論文を読んで欲しい。			

[授業科目名] 臨床心理学特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 榊原雅人
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 臨床心理学を学び、児童・生徒をよりよく理解し、彼らの諸問題に取り組めるようになるのが、テーマである。そして、心理学の応用によって、諸問題をよく理解し、より高度な技量を身につけることができるようになるのが到達目標である。			
授業の概要 臨床心理学のアセスメント法や面接法により、児童・生徒をより理解することが様々な現場で求められている。リラクゼーション法、分析的方法、行動論的方法などさまざまな心理療法の技法を会得し、それらをカウンセリングの中で活用することによって、援助できるように授業を展開する。一方、心身症、精神疾患、不登校、いじめなどの特殊な状態についても対応法などについても学ぶ。また、医療機関や福祉機関との連携などチーム・アプローチについても考える。			
学生に対する評価の方法 毎回の小テスト（60％）とレポート（40％）の成績を基準とする。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 臨床心理学の基本的発想 第2回 アセスメント（1）知能検査 第3回 アセスメント（2）臨床検査、テストバッテリー 第4回 面接、カウンセリング 第5回 介入（家族、学校、職場） 第6回 ストレス 第7回 心理療法（1）自律訓練法、リラクゼーション 第8回 心理療法（2）精神分析、交流分析 第9回 心理療法（3）行動療法 第10回 心理療法（4）家族療法、その他の治療法、統合的アプローチ 第11回 臨床心理学の対象（1）心身症 第12回 臨床心理学の対象（2）精神疾患、DSM-5、気分障害 第13回 臨床心理学の対象（3）児童・生徒の問題 不登校、いじめ、虐待 第14回 他機関との連携 医療機関、福祉機関 第15回 介入効果に関する文献の抄読			
使用教科書 使用しない			
自己学習の内容等アドバイス 次回の講義のテーマを予告するので、予習しておくこと。			

[授業科目名] 臨床心理学演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 榊原雅人
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 臨床心理学を応用して、児童・生徒の問題に取り組む演習をするのがテーマである。現場の諸問題を心理学の活用によって理解できるようになるのが到達目標である。			
授業の概要 まず、心理教育的アセスメントとは何かについて学び、さまざまなアセスメント方法、例えば、知能テスト、CMIなどの臨床テスト、臨床研究にも活用できるPOMSなどのテストについて習熟する。次に、子どもとの面接法についてその技法を演習する。それについては、ビデオをみたり、テープを聴いたり、視聴覚教材も利用する。それらの仕上げとして模擬面接実習もする。さらに、自律訓練法や交流分析の実際についても学び、コラージュや箱庭も自分で作ってみる。その上で、摂食障害、気分障害、不登校への対応をシュミレートしてみる。			
学生に対する評価の方法 毎回の小テスト（60％）とレポート（40％）の成績を基準とする。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 心理教育的アセスメントとは 第2回 心理教育的アセスメントの方法 第3回 心理検査の活用 第4回 アセスメント（1）知能検査 第5回 アセスメント（2）CMI、うつ尺度 第6回 アセスメント（3）STAI、POMS（臨床研究への活用） 第7回 アセスメント（4）その他のテスト、心理検査について、テストバッテリー 第8回 面接法 子ども面接 第9回 カウンセリング技法 ビデオ鑑賞、模擬面接 第10回 自律訓練法の実際 第11回 交流分析の実際 第12回 コラージュ・箱庭療法の実習 第13回 摂食障害への対応 第14回 気分障害への対応 第15回 不登校への対応			
使用教科書 特に使用しない。心理テスト用紙や必要な資料は配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 次回の演習のテーマを予告するので、文献などによって予習しておくこと。			

[授業科目名] 学校心理学特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 黒田美保
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 「学校心理学、特に、チーム学校を学ぶ」をテーマに、学校心理学の基本である心理教育的援助に関する基礎知識及びスクールカウンセラーに関する知識が理解できるようになることを到達目標とする。			
授業の概要 学校教育の中で、一人ひとりの子どもが学習や対人関係、進路指導等で出会う様々な問題を解決するためにどのような援助ができるのか等、子どもの成長を促進する心理教育的援助サービスについて学習する。 問題解決には、子どもを取り巻く教師や保護者などとのチームワークが必要である。授業は、これらを含む心理教育的援助に関する基礎的知識を学習し、事例を通して援助者に関する知識も学習する。			
学生に対する評価の方法 各章が終わるとレポートを提出する（10回）。さらに、その章に関連した先行研究を提供するので、各章のまとめの中に、その先行研究も入れてまとめて提出する。その提出物（70%）と授業活動態度（30%）で評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション（授業の進め方と評価等について説明）。学校心理学と教育について、学校組織の中で学校心理学をどう位置付けていくか現状の子ども達の視点から考える。 第2回 学校心理学の定義と必要性について学ぶ。又、学校心理士資格についての情報を提供する。 第3回 アメリカと日本における学校心理学について日米のスクールサイコロジストについて学ぶ。又、日本における学校心理士の現状についても学ぶ。 第4回 心理教育的援助サービスの基礎概念について、援助サービスの対象（誰を）、焦点（何を）、援助サービスの場（どこで）について学ぶ。 第5回 心理教育的援助を担う4種類のヘルパーについて学ぶ。学校組織の中での養護教諭の役割と心理教育的援助についても学ぶ。 第6回 学生からの体験談発表（ケース研究）。養護教諭やボランティアで体験しているケースについて話し、心理教育援助者としての役割について理解する。 第7回 3段階の心理教育的援助サービスについて、モデルを学び、援助サービスの対象は、すべての子どもであることを理解する。 第8回 スクールカウンセラーに求められる役割について学ぶ。特に、スクールカウンセラーの実践研究を通してスクールカウンセラーに何が求められているかを学ぶ。 第9回 スクールカウンセリングの特徴について、一般のカウンセリングとの違い、面接構造、対象者、目的等の違いについて学ぶ。 第10回 心理教育的アセスメント –心理教育的援助サービスの基盤として一子ども（学習面、心理・社会面、進路面、健康面）と環境（学級、学校、家庭等）、及びその相互作用に焦点をあて、アセスメントの方法について学ぶ。 第11回 スクールカウンセリングの実際 –子どもとの関わり–児童生徒に直接的援助を行うに当たっての関わり方（3種類の関わり）、態度、意識、注意すべき点などについて学ぶ。 第12回 スクールカウンセリングの実際 –保護者とのかかわり–教師として、スクールカウンセラーとして、保護者とどのように関わればいいのか、子どもとの関係を焦点にあてて学ぶ。 第13回 教師、保護者、学校組織へのコンサルテーション–児童生徒へのチーム援助として–援助サービスのコーディネーションについて学ぶ。特にコンサルテーションの意義とプロセスについて学ぶ。 第14回 外部機関との連携について、援助チームの進め方、学校、地域における援助サービスのシステムについて学ぶ。特に、教師、スクールカウンセラー、保護者とのチーム援助について学ぶ。 第15回 学校心理学と現状と課題及び心理教育的援助サービスを行う上での倫理について学ぶ。			
使用教科書 「学校心理学」 石隈利紀著 誠信書房（2009）			
自己学習の内容等アドバイス 予習・復習をして学校心理学についての知識を習得し、自分の仕事の中でどのような援助ができるかを考える力をつけてほしい。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
学校心理学演習		演習	黒田美保
[単位数]	[必修・選択]	備考	
2	選択		
授業の到達目標及びテーマ 「学校心理学に基づく実践力を高める」をテーマとし、学校心理学特論で学んだ心理教育的援助に関する知識を習得し、現場で生かすことができるようになることを到達目標とする。			
授業の概要 授業は実践研究論文の講読と発表・討論を中心に授業を行う。最初は、学校心理学に関する先行研究論文の講読を通して論文の読み方や書き方について学習する。次に、受講者は自己の研究課題に関係のある実践研究論文を検索してそれを発表し、全員でその研究について討論する。又、学校現場においてどのような心理教育的援助ができるのか、援助チームシートを活用して討論し、現場で役に立つ知識を学習する。			
学生に対する評価の方法 発表と授業中の活動態度（40%）とレポート（内容とまとめ方を重視、60%）で評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション。授業の概要と評価について説明 第2回 学校における心理教育的支援サービスについての概要の講義 第3回 学校における心理教育的支援サービスについて、各自調べたことを発表と討論 第4回 実践研究論文講読－研究論文の読み方について学習 学会誌（教育心理学研究・LD研究など）より選択、提供し、学生はどの論文を発表するか又発表の順番を決める（提供する論文数は大学院生の人数による）。 第5回 選択した先行研究1編を読んで発表し、全体で討議する。発表者はレポートを提出。 第6回 別の学生が発表し、全体で討論。発表者はレポートを提出。 第7回 特別支援教育の概要について講義 第8回 特別支援教育の対象となる生徒について講義および討議 第9回 各自、特別支援教育に関する先行研究を検索、選択し読む。 第10回 選択した先行研究1編を読んで発表し、全体で討議する。発表者はレポートを提出。 第11回 別の学生が発表し、全体で討論。発表者はレポートを提出。 第12回 ケース研究 事例を読み、分析、討論① 第13回 ケース研究 事例を読み、分析、討論② 第14回 心理教育的の実践に向けて（援助チームシートの書き方を学習） 第15回 心理教育的援助の実践における援助チームシートの活用と討論。まとめ			
使用教科書 「チーム援助入門－学校心理学・実践編－」 石隈利紀・田村節子著 図書文化（2003）			
自己学習の内容等アドバイス 提供する先行研究論文や修論に関連した論文など、多くの研究論文を読んで学校心理学の知識を深め、現場で生かせるような学習方法を考えよう。			

[授業科目名] 学習心理学特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 赤嶺 亜紀
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ この授業では人の学習を支えるしくみや原理を理解できるようになることを目標とする。そして、学校現場での課題、とくに学習に関わる問題への心理教育的援助サービスの実践の素地を養う。			
授業の概要 はじめに学習に関するさまざまな心理学的理論を概説する。そして、それらの知見に基づき、効果的な学習指導のあり方や学習の場として望ましい学級のあり方について、受講者みなで討論する。			
学生に対する評価の方法 評価は主に担当テーマの発表と学期末のレポートに基づくが、平常の授業態度（発言や質疑、討論への参加など）を考慮する。成績評価の配分は、担当テーマの発表 40%、期末レポート 40%、授業時の発言や討論への参加 20%。ただし、この配分は、課題の達成度により若干変更することがある。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1 回 導入：学校教育の基盤としての教授・学習心理学 第 2 回 学習の理論 (1)： 学習の行動論的見方 第 3 回 " (2)： 学習の認知論的見方 第 4 回 " (3)： 学習の活動論的見方 第 5 回 記憶と理解 (1)： 記憶のしくみ 第 6 回 " (2)： ワーキングメモリ 第 7 回 " (3)： 概念形成 第 8 回 " (4)： 問題解決 第 9 回 動機づけ (1)： 動機の種類 第 10 回 " (2)： 学習・教育と動機づけ 第 11 回 学習指導と授業 (1)： 学習指導の理論的背景 第 12 回 " (2)： 個人差に応じた指導 第 13 回 学級集団とその組織化 (1)： 学級内の相互作用 第 14 回 " (2)： 学級集団の成立・発展過程 第 15 回 まとめ： 科学的な研究と教育の実践 第 11, 12 回 学習指導と授業 第 13, 14 回 学級集団とその組織化 これらのテーマは、学生の担当者が発表する。			
使用教科書 必要に応じて資料を配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 学校心理士をめざす学生の参考図書（学校心理士資格認定委員会（編）「学校心理学ガイドブック」 風間書房など）をよく読んでおく。 例えば CiNii Articles や EBSCOhost などのデータベースを活用して、各回のテーマに関連する文献を入手し、最新の研究動向をとらえる（予習・復習それぞれ 90 分）。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
学習心理学演習		演習	赤嶺 亜紀
[単位数]	[必修・選択]	[備考]	
2	選択		
授業の到達目標及びテーマ <p>心理教育的アセスメントの実習を通して、知能検査の理論的基盤と検査の尺度構成、標準化検査の意味を理解する。そして、アセスメントに関する多様な能力の基礎を獲得し、現場で実践できるようになることが到達目標である。</p>			
授業の概要 <p>心理教育的アセスメント実習として、個別式知能検査の実施、結果の解釈と指導案の作成を取り上げる。</p>			
学生に対する評価の方法 <p>3種の課題それぞれについてレポート作成を求める。ここで課すレポートは（学校現場での指導案も同様）科学的報告書であり、事象を客観的、合理的に記述することを重視する。 実習課題はいずれもグループ活動を求めるものであり、各人の積極的な取り組みが不可欠である。成績の評価は、各自のグループ活動への貢献度を考慮する。 成績評価の配分は、3種の課題レポート60%、授業時の課題への取り組み20%、期末レポート20%。ただし、この配分は課題の達成度により若干変更することがある。</p>			
授業計画（回数ごとの内容等） <p>第1回 心理教育的アセスメントの意義 第2回 課題1：田中・ビネー知能検査 (1) 検査の特徴（理論的基盤、尺度構成など） 第3回 // (2) 検査の実施（練習） 第4回 // (3) 結果の整理・検査報告の作成（受講者による討論を含む） 第5回 課題2：ウェクスラー式知能検査 (1) 検査の特徴 第6回 // (2) WAIS-IV 手続きの理解 ① 第7回 // (3) WAIS-IV 手続きの理解 ② 第8回 // (4) WAIS-IV の実施 第9回 // (5) 結果の整理 第10回 // (6) 検査報告の作成（受講者による討論を含む） 第11回 課題3：K-ABC 心理・教育アセスメントバッテリー (1) 検査の特徴 第12回 // (2) 検査の実施（練習） 第13回 // (3) 結果の解釈 第14回 // (4) 検査報告の作成（受講者による討論を含む） 第15回 まとめ：効果的な心理教育的アセスメント ※ 可能であれば、幼児・児童を対象に検査（田中ビネーあるいはK-ABC）の実施を試みたい。</p>			
使用教科書 <p>必要に応じて資料を配布する。</p>			
自己学習の内容等アドバイス <p>例えば CiNii Articles や EBSCOhost などのデータベースを活用して、各回のテーマに関連する文献を入手し、最新の研究動向をとらえる（予習・復習それぞれ90分）。 適宜、参考文献を紹介するが、自らの興味にそって自発的に読書することをすすめる。</p>			

[授業科目名] 特別支援教育特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 吉村 匡
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 障害のある幼児児童生徒における教育の歴史と現状並びに障害児・者に対する社会の意識の変化や福祉制度等について、特別支援学校や学級等における具体的な教育内容の事例や映像資料を挙げながら講義並びに討議形式で概観する。 また通常の学級に在籍する発達障害の児童生徒や、成人した発達障害の人達の生きにくさについて、映像資料を用いて、その特性と理解並びに支援の方策について理解を深める。 この講義を通して、心理臨床や保育・教育の現場で出会う機会が多い発達障害について、その子どもと家族への支援について学ぶ。 更に「障害児教育」の歴史や現状を知るとともに、支援のための基礎的な理論・方法と社会制度の変化や関係諸機関との連携の在り方などを包括的に学ぶことをねらいとする。			
授業の概要 特別支援教育における教育実践とその課題について、障害の理解と支援の在り方や方法に焦点を当てて講義・討議を展開する。			
学生に対する評価の方法 評価は、講義への参加・発言（30%）、課題の発表・討議（30%）、レポートの提出（40%—内容とまとめ方）等で総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1 回 各回の講義内容についての説明 第 2 回 特別支援教育の理念とは 第 3 回 特別支援教育の歴史について 第 4 回 障害について（ICIDH から ICF へ） 第 5 回 障害のある幼児児童生徒の診断について 第 6 回 ユニヴァーサル・デザイン（UD）の理念と授業のUD化について 第 7 回 実態把握と教育相談の在り方 第 8 回 個別の教育支援計画と個別の指導計画の実際 第 9 回 学校での実践、学校現場での課題解決（事例検討） 第 10 回 就学相談の在り方 第 11 回 小・中学校での実践 第 12 回 高等学校での実践 第 13 回 地域における連携と情報共有について 第 14 回 教職員の専門性の確保について 第 15 回 特別支援教育の意義と展望			
使用教科書 特になし（講義の都度、資料を用意する）			
自己学習の内容等アドバイス 毎回の講義の終わりに、次回の講義に関する論文・参考図書を紹介するので通読し事前学習とすること。 また講義後は、関心のある内容について論文を検索し口頭で報告すること。 主な参考図書 ① 「発達障害の子どもたち、『みんなと同じ』にならなくていい。」長谷川敦弥作・SB 新書 ② 「読めなくても、書けなくても、勉強したい」井上智・賞子作・ぶどう社 ③ 「発達障害を生きる」NHK スペシャル取材班・集英社 ④ 「働く、ということ」佐藤仙務作・彩図社 ⑤ 「怠けてなんかない!②」品川裕香著・岩崎書店			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
特別支援教育演習		演習	吉村 匡
[単位数]	[必修・選択]	[備考]	
2	選択		
授業の到達目標及びテーマ 就学前、小・中学校、高等学校における特別支援教育の現状と課題を整理する。また関係機関との連携の在り方について、事例をもとに考察する。フィールドワークとして視覚・聴覚・肢体不自由・知的特別支援学校の視察を行う。以上のことから、今後特別支援教育が発展するために必要とされる事柄について理解を深めることを目標とする。			
授業の概要 小学校入学前の就学相談を皮切りに、小・中学校や高等学校、特別支援学校における指導や支援の現状を知る。地域連携について困難事例をもとに、各自調査した上で討議する。フィールドワークとして障害種別の特別支援学校を訪問し、そこで行われている障害に応じた指導や支援について学びを深める。			
学生に対する評価の方法 評価は、講義への参加・発言（30%）、課題の発表・討議（30%）、レポートの提出（40%—内容とまとめ方）等で総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1 回 特別支援教育の理念と基本的な考え方について 第 2 回 特別支援教育の歴史と、対象とする幼児児童生徒について 第3・4回 フィールドワーク（愛知県立視覚障害特別支援学校に出向き、実際の指導場面を観察する） 第 5 回 ○ユニヴァーサル・デザイン（UD）が目指すもの、○地域で共に学び共に生きる教育（交流及び共同学習）、○就学前における発達及び学習支援の在り方について 第6・7回 フィールドワーク（愛知県立聴覚障害特別支援学校に出向き、実際の指導場面を観察する） 第 8 回 ○小・中学校における発達及び学習支援の在り方について、○特別支援教育が対象とする幼児児童生徒の障害の診断と優生思想について 第9・10回 フィールドワーク（愛知県立の知的障害特別支援学校に出向き、実際の指導場面を観察する） 第 11 回 ○高等学校における特別支援教育の現状と課題について、○特別支援学校・特別支援学級における障害に応じた指導・支援の在り方について 第12・13回 フィールドワーク（愛知県立の肢体不自由特別支援学校に出向き、実際の指導場面を観察する） 第 1 4回 ○地域との連携を視野に入れたケース・スタディ（関係機関との連携①）、○特別支援教育に携わる教職員に求められる専門性について 第 15 回 ○地域との連携を視野に入れたケース・スタディ（関係機関との連携②）、○特別支援教育の発展のために必要な事柄について討議する			
使用教科書 特になし（講義の都度、資料を用意する）。			
自己学習の内容等アドバイス 毎回の講義の終わりに、次回の講義に関する論文・参考図書を紹介するので通読し事前学習とすること。また講義後は関心のある事柄について論文を検索し口頭で報告する。学校視察の後も感想・課題等を整理して報告すること。 主な参考図書 ① 「自閉症だったわたしへ」 ドナ・ウィリアムズ著・新潮文庫 ② 「怠けてなんかない！」 品川裕香著・岩崎書店 ③ 「発達障害当事者研究」 綾屋紗月・熊谷晋一郎共著・医学書院 ④ 「目の見えない人は世界をどう見ているのか」 伊藤亜沙著・光文社新書 ⑤ 「子どもへのまなざし」 佐々木正美著・福音館書店 ⑥ 「ちゃんと泣ける子に育てよう」 大河原美以著・河出書房新社 ⑦ 「うちの子は字が書けない」 千葉リョウコ著・宇野彰監修・ポプラ社 ⑧ 「自閉症の僕が跳びはねる理由」 東田直樹著・エスコアール			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
学校教育相特論		講義	遠山 久美子
[単位数]	[必修・選択]	[備考]	
2	選択		
授業の到達目標及びテーマ			
<p>本授業のテーマは、子どもの発達・人格の成長を促すために、教育相談・生徒指導・キャリア教育においてどのような指導・支援が求められているのかを理解することである。以下の3点を到達目標とする。</p> <p>(1) 教育相談・生徒指導・キャリア教育の意義と役割について理解する。</p> <p>(2) 教育相談の基盤となるカウンセリングの基礎知識・技法にやついて理解する。</p> <p>(3) 教育相談・生徒指導・キャリア教育における課題について理解し、具体的な対応や展開の在り方について考察する。</p>			
授業の概要			
<p>教育相談・生徒指導・キャリア教育の役割や教育相談の基盤となるカウンセリングの理論や技法を理解し、子どもと学校を取り巻く様々な課題について具体的な対応を探求するプロセスを通して、これからの教育相談・生徒指導・キャリア教育の在り方を考察する。</p>			
学生に対する評価の方法			
<p>随時提示する課題等に対するレポート等の内容と提出状況（30%）、受講への取り組み姿勢と授業への参加態度（20%）、総括レポート（50%）を総合的に判断して評価する。</p>			
授業計画（回数ごとの内容等）			
第1回 オリエンテーション・教育相談・生徒指導・キャリア教育の目標・意義と役割			
第2回 キャリア教育の目標・意義と内容			
第3回 キャリア教育の具体的な展開			
第4回 教育相談の基盤となるカウンセリングの技法			
第5回 子どものアセスメント（教師・スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカー）			
第6回 不登校の歴史・実態・タイプ・背景と支援の実際			
第7回 いじめ問題の理解と支援・重大事態への対応			
第8回 非行問題の理解と対応			
第9回 精神疾患と心身症の理解と対応			
第10回 配慮が必要な子どもの理解と対応			
第11回 児童虐待と教育相談・子どもの貧困と教育相談			
第12回 保護者対応・支援の実際			
第13回 学校教育相談の現代的課題の理解と対応 ①性の多様性・外傷体験（事件・事故・災害）			
第14回 学校教育相談の現代的課題の理解と対応 ②自傷・自殺予防教育・ゲーム障害			
第15回 チームで行う教育相談・生徒指導・キャリア教育に関するまとめ			
使用教科書			
高岸幸弘・井出智博・倉岡智子（2018）「これからの教育相談」北樹出版			
自己学習の内容等アドバイス			
『生徒指導提要』（文部科学省）を読み、学校教育相談のあり方を理解したり、日頃教育現場で問題となっていることに調べたりしておく。毎授業前後に事前学習・復習（疑問点・意見等）として1時間程度を充てる。			

[授業科目名] 学校教育相談演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 遠山 久美子
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ テーマ：自分自身の個性にあった「教育相談の方法」を構築するための力量を身につける。 到達目標：不登校・いじめ問題等への対応が大きなきっかけとなり、文部科学省はその施策の一環として学校教育相談の充実を目指してきた。学校教育相談の充実のためには、教師の「教育相談に関する力量」の向上が必要不可欠である。この演習の到達目標は、学校現場できちんと応用できる学校教育相談の在り方を自分のものにできるようになること。			
授業の概要 「教師」としてのありようは、この「教育相談」に対する、理解力、判断力、実践力、指導力にかかっている。「いじめ」「自殺」や「非行の低年齢化」等の今日的課題の多い中で、如何なる方法で健全な人間性の育成にあたるか、現場での実践例を多用して、その指導方法や問題点を究めていく。			
学生に対する評価の方法 随時提示する課題等に対するレポート等の内容と提出状況（30%）、受講への取り組み姿勢と授業への参加態度（20%）、試験結果（50%）を総合的に判断して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス 第2回 学校・学級アセスメントの在り方 第3回 アセスメントにおける PDCA 第4回 教育評価の目的 第5回 測定と評価 第6回 学校教育と教員の在り方 第7回 生徒指導及び教育相談 第8回 ケーススタディ① 児童・生徒の適応と問題行動の理解 不登校 第9回 ケーススタディ② 児童・生徒の適応と問題行動の理解 いじめ 第10回 ケーススタディ③ 児童・生徒の適応と問題行動の理解 ノイローゼ等病的事例 第11回 ケーススタディ④ 児童・生徒の適応と問題行動の理解 自殺 第12回 特別支援教育と教育相談 第13回 クライシスセオリーと教育相談 第14回 思春期の理解と教育相談 第15回 まとめ			
使用教科書 毎講義に配布するテキスト(レジュメ)を使用する。			
自己学習の内容等アドバイス 日頃教育現場で問題となっていることに関心を持ち、調べておくこと。 次回の授業における「キーワード」について調査・理解し、必ず事前学習を行っておく。			

[授業科目名] 学校カウンセリング特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 浜田 恵
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 本授業のテーマは、子どもの成長と発達を援助する学校カウンセリングの考え方や技法を理解することである。以下の3点を到達目標とする。 (1) 学校カウンセリングやコンサルテーション、コーディネーションの考え方について理解する。 (2) 学校カウンセリングやコンサルテーションを実践する上での問題を理解し、その対応について考える。 (3) 学校カウンセリングの基礎的な技法について理解する。			
授業の概要 子どもと学校を取り巻くさまざまな課題、および、学校カウンセリングの理論や実際を理解し、具体的な取り組みを探究するプロセスを通して、これからの学校カウンセリングの在り方を追求する。			
学生に対する評価の方法 随時提示する課題等に対するレポート等の内容と提出状況（30%）、受講への取り組み姿勢と授業への参加態度（20%）、試験結果（50%）を総合的に判断して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション 社会の変化と学校教育、学校カウンセリングとは 第2回 児童生徒を取り巻く諸課題1 不登校、特別支援教育 第3回 児童生徒を取り巻く諸課題2 いじめ、自殺・自傷 第4回 児童生徒を取り巻く諸課題3 校内暴力、非行、虐待 第5回 児童生徒を取り巻く諸課題4 学習に関する問題、ユニバーサルデザイン 第6回 子どもの成長と発達1 感覚、認知 第7回 子どもの成長と発達2 道徳性、感情 第8回 学校カウンセラーの役割とコンサルテーション 第9回 コーディネーション チームとしての援助 第10回 校内連携・校外連携 第11回 家庭との関わり 第12回 カウンセリングの基本技法1 「聴く」と「聞く」と「訊く」の違い、受容と共感 第13回 カウンセリングの基本技法2 さまざまなサポート、接点 第14回 カウンセリングの基本技法3 ソーシャルスキルトレーニング 第15回 まとめ			
使用教科書 本田恵子・植山起佐子・鈴木眞理編（2019）改訂版 包括的スクールカウンセリングの理論と実践：子どもの課題の見立て方とチーム連携のあり方。金子書房			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業における「キーワード」について調査・理解し、必ず事前学習を行っておく。 『生徒指導提要』（文部科学省）を読み、学校カウンセリングに対しての姿勢のあり方を理解しておくこと。			

[授業科目名] 学校カウンセリング演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 浜田 恵
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 本授業のテーマは、学校カウンセリングの在り方を理解し、実際に実施できる基本的な技法を身につけることである。以下の3点を到達目標とする。 (1) 学校での児童生徒との関わり、および、児童生徒同士の関わりを促進するためのかかわりづくりに関する技法を身につける。 (2) 児童生徒や保護者の話を丁寧に聴くための基本的な傾聴技法を身につける。 (3) カウンセリングのプロセスを理解し、コンサルテーション、コーディネートを含む事例について考えることができるようになる。			
授業の概要 学校カウンセリング、コンサルテーションと学校の連携、学級経営、発達障害やその傾向のある児童生徒へのカウンセリングで必要とされる技術などについて、討議、グループワーク、ロールプレイを通して、理解を深める。			
学生に対する評価の方法 随時提示する課題等に対するレポート等の内容と提出状況（30%）、受講への取り組み姿勢と授業への参加態度（20%）、試験結果（50%）を総合的に判断して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション カウンセリング・マインド、枠組み 第2回 かかわりづくりに関するグループ実習1：構成的グループエンカウンター理論 第3回 かかわりづくりに関するグループ実習2：構成的グループエンカウンターの実践 第4回 かかわりづくりに関するグループ実習3：友だち作りのための技法（共通の興味を見つける） 第5回 かかわりづくりに関するグループ実習4：友だち作りのための技法（良い会話とは何か） 第6回 かかわりづくりに関するグループ実習5：友だち作りのための技法（会話を始める・終わる） 第7回 傾聴実習1 「聞く」と「聴く」の違い、非言語的の手がかり（ロールプレイ） 第8回 傾聴実習2 質問法・言い換え・繰り返し（ロールプレイ） 第9回 傾聴実習3 はげまし・感情の反応（ロールプレイ） 第10回 傾聴実習4 保護者の対応（ロールプレイ） 第11回 総合実習1 不登校の事例 第12回 総合実習2 感情のコントロール困難に関する事例 第13回 総合実習3 ストレスマネジメントの理解と実践 第14回 総合実習4 学校の危機対応とコンサルテーション、コーディネート 第15回 まとめ			
使用教科書			
自己学習の内容等アドバイス 今回の授業における「キーワード」について調査・理解し、必ず事前学習を行っておく。			

[授業科目名] 特別研究		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 指導教員
[単位数] 8	[必修・選択] 必修	[備考]	
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>修士論文の作成に向けて、関係する論文の読み方、書き方を理解し、各自が設定した研究課題に関する修士論文を作成していく。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>授業は、個別指導とゼミナール形式で行う。個別指導においては、関連する論文を通して論文の読み方、書き方の指導を行う。また、ゼミナールでは各自が自分のテーマと関連した研究論文を検索し発表する。発表後は内容を検討しながら個々の問題を明らかにし、修士論文作成まで指導を行っていく。</p>			
<p>学生に対する評価の方法</p> <p>研究への取り組み度並びにゼミナールのプレゼンテーション力など総合的に評価を行う。</p>			
<p>授業計画（回数ごとの内容等）</p> <p>オリエンテーション・個人指導・ゼミナール等を適宜実施していく。</p>			
<p>使用教科書</p> <p>適宜紹介をしていく</p>			
<p>自己学習の内容等アドバイス</p> <p>2年間の研究成果が導き出せるよう、積極的に取り組むこと。</p>			